撰集考異

上

11
309

始

11-309

善學院君傳

冨永氏二世善學院君諱裕字好問爲人温厚謹格不以得表經心一竅化之旃々然々年甫十六遊江都入龜田鵬齋門四部之籍無不該覧而於經世有用之書最致思焉善屬詩文傍學國雅於北川真顔窗藤彦麿画於中林竹洞皆臻其室如刀圭之術則益極精妙家雖金隆性嗜酒好古翫則與客劇飲四方歷遊之士常盈座有人乞歌及画者不應唯飲之酒而有時乎系興揮灑不擇人與之隻简寸紙人以爲至寶尤存心於愛物民之貧窶者損貲救之遇凶歉必發倉賑濟一鄉稱爲仁厚長者弘化紀元遊於長崎遂採討諸國山川地形尋訪當族名家撰諸國郡鄉考十五卷其餘所著選集考異二十卷竹邨詩話明清無麟詩幽若干卷皆藏家君學有餘而言不足人以爲唯酒之耽悲夫著述之富技藝之精如此孰能測其蘊奥也

明治二十九年四月　高等師範學校教授正六位南摩綱紀識

祖父春部が著述いと多かる中にも、和名抄諸國郡郷考と、この撰集考異とは、特更に意を留めたるものなれど、生存中には脱稿せしのみなりしかば父準清その意を受けて上梓せむとせしも、在野にては彼是思ひに任せぬ事とて、漸く和名抄諸國郡郷考のみ、世に公にする事を得たり。依て不肖また其意を繼ぎ、嘗て出版せむとして、携へて東京に上り、專門家諸氏に議り、かつは訂正增補をも加へ、その用意しつゝある程に、歳月次第に遷回して、明年は早くも祖父の七十年忌齋に當るを以て、その記念印刷として刊行し、祖父の靈前に供ふるは勿論、尋知諸彦にも頒たむと欲し、やがてかくはものしつるになむ

大正八年十月　宮永孝太郎謹述

帝國圖書館藏

序文

撰集考異は、古今和歌集より始めて、新續古今和歌集に至るまで、二十一代の勅撰集中の歌を、その作者の家集、さては私撰歌集、または歌合、日記、物語などの書に、悉くひき比べよみ合せつゝ、かれ是と徵し[illegible]て、その異動を考へ示せるものなり。難波の阿闍梨の河社、あるは古今和歌六帖の標註、また其他にも、異動をあげつらへる書はあれど、二十一代集を首卷より尾卷に、貫きとほして詳かにせしものは、この書の外には決めてあらずなむ。されば公私の歌集を研究せむ人、或は歌よまむ人などは云ふも更なり。すべて勅撰集を繙かむものゝ爲には、まことや又なき參考書と

云ひつべし。此頃、著者春部翁の孫孝太郎君、予が麴町半藏門外の居を訪ひ、今回增補訂正を加へて印刷せむとす。いかで一閲のうへ、此序をがなとなり、予は春部翁および其男準清君とは、素より親しき中なりしかば、いなみがたきは云ふまでもなく、その在りし世の事ども、何くれと思ひ偲ばるゝ餘りに、一言かくなむしるす。

大正元年三月

文學博士井上頼圀

和歌撰集考異序

人之讀書也專務博而不務精執不欲博而精哉力不足或畫之故今稱博學者雜博而無統紀也名精究者唯止四書小近而不知諸子百家爲何物也學非博而精者不足尙也夫今稱博學者知涉獵羣書而不知得要領所讀畢之書花乎不知何爲而作但記奇事異說一二事詩說稠人衆坐欲人之聳聽之此雖似務博爲售名之具博亦無所用焉至博學而精密者始爲有所用焉然則讀書人孰不欲博且精邪苟欲精密之則匿々數紙小册子亦費數日工夫汗牛充棟之書册々如此則有日不足之憂趨

草々看過博雜涉獵之途終身爲無用之學究者多實可歎哉余友竹村先生與余同甲子最相親愛先生家世以眼科爲業國手之名馳於四方以是患眼者雜沓於門而先生偷刀圭之暇讀和漢之書作爲詩歌以供酬樂余以爲先生之業如此其劇也其讀書也必不過草々看過余所攻者獨經史一途而已不有別所業然性遲鈍未能精究一經而先生該讀和漢之書以余推之先生之讀書也必疎漏訛謬以博雜爲恐喝人之具故余伏眼科之精而蔑如其學術先生不幸年五十有一而卒其嗣子竹苑從學於余有年於茲矣今茲甲寅余來寓其家竹苑出先生所撰之撰集考異數卷以示余且囑序受讀之擧列和歌撰集諸家家集數十種彼是異同者其用心非比對勘考搜採綴緝練漉心膓者不能也先生刀圭甚劇且尋繹經史又爲皇國之學以余遲鈍推之其讀書必疎漏訛謬徒以博雜恐喝人今見此撰而知其不然於是始知先生資性捷敏非若余輩者也余曩蔑如者以余性之遲鈍槩先生也余之於先生所謂白頭如新可謂親愛之友耶可謂知已友耶慙懼以謝遲鈍

嘉永七年仲秋望後二日

蒲原肥田野徹士朝撰

本書增訂のゆゑよし

大正元年の秋の事にやありけむ。井上文學博士の手翰を携へ、冨永孝太郞君、わが萬喜の舍をなむ訪はれける。氏は新潟縣の名族にして、その祖父春部翁は、榊原芳野、齋藤彥麿、井上文雄、近藤芳樹、諸岡正胤、本居豐頴などゝ親しく、和名抄諸國郡鄕考、撰集考異、其他數部の著書あり。諸國郡鄕考十五卷は、翁の男準淸君訂正して、近藤瓶城氏に託して、存採叢書の中に加へ、既に世に公にせらる。撰集考異二十一卷は、今回氏自身校訂して提げ來り、瓶城の男近藤圭造氏に託して、やがて刋行せむとして予に示さる。即ち直に之を通覽して思へらく、參考書籍の自由なる現代に於て、之を世に公にせむには、なほしも增補訂正の要あるべし。そはかの書この集などゝ注意せしに、

氏もけにとて歡迎せられ、更にそれ〴〵つてを得て、公私の文庫、圖書館、または諸藏書家の門をたゝき、出來うる限の便宜を得て、麴町永田町の星影軒に於て、ふたゝび增訂を了せらる。されどなほ漏れたる歌、遺れる集もありぬべきかなれども、そは再刊のをりにもとて、急かに印刷する事とせれば、こゝに一言そへよと乞はるゝまゝに、ありし樣を聊かしるすになむ。

大正七年十月

萬暮舍主人　逸見仲三郎

例言

一本書は、醍醐天皇以下二十一代の勅撰和歌集、即ち古今和歌集より、新續古今和歌集までの集中に修められたる歌を、その作者の家集、或は私撰歌集、又は歌合、日記、物語、草紙などの書に合せて、其異動を明確に指示し、比較的研究の一大材料として、祖父が撰修しおきたるものなり。

一本書は、撰集考異と稱すれども、前記の目的を以て撰修したるが故に、祖父が眞の考按としては、之を他日に讓りて玆に詳述せず、たゞその類例、異句、優劣、佳邪、眞僞、等を區別するに、極めて簡短なる評語を以てし、其他多くは、讀者の考慮に任せて判定すべく修成せらる。

一本書考異の材料とせし書は、祖父が記載しおきたる引用書目に明なり。今又その書目に分註を加へ、增補訂正に要したる類書を示し、且諸書を略稱したる唱呼をもあげて、別に之を添附したれば、本文と相互に參照して、詳細に之を解得せらるべし。

一本書もと、大冊二卷に合綴してありつれども、增補訂正と印刷上との都合により、更に上中下の三卷に改綴したり。

一本書の增補訂正につきては、井上賴𡺸君、逸見仲三郎君の、大に力を添へられたるがため、容易に完成を見るに至れり。また此兩氏を始め、增訂者の意を受けて、專ら校合の事に與られしは、加藤龜松氏なり。尋いで印刷製本等に關しては、近藤圭造氏の盡力少からず。依て聊か附言して玆に其勞を深謝す。

大正七年二月

富永孝太郎

撰集考異引用書目

萬葉集　文字は仙覺本により、訓は略解本によれり
古今六帖　標註本による、本書中には六帖と稱せり
新撰萬葉集　五條家本をも參照せり
小野道風秋萩帖　正倉院御物及搨本とも參照
貫之集　三十六人集本、群書類從本、同兩書活字本、古寫本等
躬恒集　同上
伊勢集　同上
猿丸大夫集　同上
柿本集　同上〇人麿集並に同一本等
赤人集　同上
小町集　同上
是則集　同上
重之集　同上
家持集　三十六人集本、群書類從本、同兩書活字本、古寫本等參照
忠岑集　同上
兼盛集　同上
兼輔集　同上
素性法師集　同上〇本書には素性集と稱す、
中務集　同上
元眞集　同上
朝忠集　同上
淸正集　同上
興風集　同上
源宗干朝臣集　同上〇本書にては、たゞ宗干集と稱せり、
小大君集　同上
高光集　同上

忠見集 同上
源信明集 同上
公忠朝臣集 同上〇本書には、公忠集と稱せり、
能宣集 同上
曾根好忠集 古寫本、或一本、又一本、類從本、同活字本
閑院左大將朝光卿集 同上〇本書には朝光集と稱す、
西宮左大臣集 同上
元良親王御集 同上
九條右大臣集 同上
大納言成通卿集 同上〇本書には成通集と稱す
前大納言實國卿集 同上
藤原長能卿集 同上
祭主輔親卿集 同上
大藏卿行宗卿集 同上

權中納定賴卿集 同上〇本書には定賴集と稱す
藤原隆信朝臣集 同上
寂蓮法師集 同上
寛平御時后宮歌合 群書類從本、同活字本等
亭子院哥合 同上
在民部卿歌合 同上
寛平菊合 同上
天德四年三月卅日內裏歌合 歌合部類、類從本參照
上東門院菊合和歌 同上
朱雀院女郞花合 同上
近江御息所歌合 同上
多武峰往生院歌合 同上
長元八年五月十六日賀陽院水閣歌合 同上
治曆四年五月五日禖子內親王家歌合 同上

治曆四年十二月廿三日呂保殿歌合 同上
天延三年三月一條大納言家歌合 同上
長曆二年九月十三日源大納言家歌合 同上
元永元年十月十日大臣家歌合 同上
拾遺抄 同上
袖中抄 橋本本と校合
續詞花和歌集 同上
雲葉和歌集 同上
金玉集 同上〇中院本、古寫本參照
紀氏新撰 同上
三十六人集 次と同書なれども、其內容に往々異る所あり
三十六人撰 同上〇歌學叢書
大江千里句題和歌 同上
新撰朗詠 同上

玄々集 同上
後葉和歌集 同上
萬代和歌集 中院本をも參照
夫木集 二本校合本による
新葉和歌集 中院本、村上本、標註本參照
和歌色葉集 類本校合本
公任卿集 群書類從本、同活字本、
草菴集 同續編、評解本參照
散木奇歌集 僧忠淵本をも參照
忠度集 群書類從本、同活字本
和泉式部集 同上
紫式部集 同上
賀茂保憲女集 同上
小馬命婦集 同上

相摸集 同上
馬内侍集 同上
本院侍從集 同上
祐子內親王家紀伊集 同上
正治二年御百首 同上
伊勢物語 同上〇此他類本參照
大和物語 同上
榮花物語 類本參照
長府本平家物語 水戸本參照
土左日記 群〻類從本、同活字本、其他類本數種參照
盧主 同上
古今著聞集 類本參照
沙石集 同上
續古事談 群〻類從本〇國史大系本、其他參照

京極中納言僻案抄 同上
無名抄 同上
日本風土記 類本挍合
歌林良材集 下河邊本と挍合
後六々撰 群書類從本、同活字本參照
僧正遍昭集 同上〇三十六人集、同活字本參照
神樂歌 諸註釋書參照
催馬樂 同上
袋草紙 中院本と挍合
公任卿前十五番歌合 群書類從本、同活字本
仝卿後十五番歌合 同上
建仁元年二月老若五十首歌合 同上
建仁元年三月廿九日新宮歌合 同上
檜垣嫗集 群書類從本、同活字本參照

二條大皇太后大貳集 同上
天德四年三月卅日內裏哥合 同上
長久二年弘徽殿女御十番哥合 同上
天喜四年四月卅日皇后春秋哥合 同上
清輔朝臣集 同上
新三十六人撰 同上
後六々撰 群類書從本、同活字本
赤染右門集 同上〇古刊本をも參照
治承二年三月十五日別雷社歌合 同上
爲頼朝臣集 群書類從本、同活字本
源順朝臣集 同上
藤原仲文集 同上
大中臣頼基朝臣集 同上
實方朝臣集 同上

上東門院菊合和歌 同上
圓融院扇合 同上
嘉禎二年七月遠島哥合 同上
堀川院艷書合 同上
後冷泉院根合 同上
台記 古寫本、記錄部類、台別記參照
前參議教長卿集 同上
讚岐入道集 同上
金槐集 鎌倉右大臣集古寫本、類從本、同活字本參照
中納言雅兼卿集 同上
按納言長方卿集 同上
長元二年四月七日大納言家哥合 同上
長曆二年九月十三日源大納言家歌合 同上
祐子內親王家歌合 同上

安法々師集　同上

[stamp]

撰集考異第一

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

古今和歌集

春哥上　　在原元方

ふるとしに春たちけるひよめる

年のうちに春はきにけりひとゝせをこそとやいはん今年とやいはん

六帖春立日に出づ、本集に同じ、日本風土記に年内立春、獨世那屋之尼發而外氣尼結里許多獨世和箇所多也以外奴口獨世多也以外奴と、異様の文字にてものしたるからに、人もよみわびたるにや、別に云へるものなし

題しらす　　讀人しらす

春かすみたてるやいづこ三吉野のよしのゝ山にゆきはふりつゝ

六帖霞に出づ、赤人集、おなじ、活字本赤人集に四の句よしのゝ奥にとせり

題しらす　讀人しらす

梅かえにきゐるうくひす春かけてなけともいまた雪はふりつゝ

紀氏新撰、催馬樂梅枝、六帖鶯に出づ

題しらす　讀人しらす

春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

勢語十二段に首句、むさしのはとあり

かすかのゝとふひの野守いてゝみよ今いくかありて若菜つみてん

紀氏新撰、和哥色葉集に出づ、うた本集に同じ

梓弓おしてはるさめけふゝりぬあすさへふらは若菜つみてん

紀氏新撰、六帖若葉、雨にも出づ

題しらす　讀人しらす

百千鳥さへつる春はものことにあらたまれともわれそふりゆく

萬葉十、赤人集等に上句、冬はすき春はきぬれと年月はとし、下の句我ぞヲ人はとせるうたあり、そを引直したるうたなるべし

をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふ子鳥かな

六帖よぶこ鳥に出でゝ本集の如し、また猿丸大夫集にも出づ、三十六人撰には作者猿丸大夫とあり、和哥色葉集にはよみ人しらずとせり

題しらす　讀人しらす

をりつれは袖こそにほへ梅の花ありとやこゝにうくひすのなく

伊勢集に出づ、活字本おなじ

宿ちかくうめの花うゑしあちきなくまつ人の香にあやまたれけり

猿丸大夫集に見ゆ、活字本おなじ

梅の花たちよるはかりありしより人のとかむる香にそしみける

兼輔集詞書、いと忍びたるうつり香の、人しるばかりありければ、その女に」とあり

梅の花をゝりて人におくりける　とものり

君ならでたれにかみせんうめのはな色をも香をもしる人ぞしる

六帖梅に出づ本集におなじ、友則集本集の如し、信明集、詞書、人のゆるさぬなかにやありけんをとこ「そめておもふ色はふかきを口なしのいはれぬ色と人やみるらん」いきたるにあはねば「あたらよの月と花とをおなじくはあはれしれらん人にみさばや」返し「きみならで云々とあれと誤なるべく覺ゆ、日本風土記に題を請人摘梅として吉蜜乃賴鐵打里爾革蜜設奴烏蜜那法乃以路和木革和木識而許多所失而と志たり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　よみ人志らす

うめか香を袖にうつしてとゝめては春はすぐとも形見ならまし

寛平中宮歌合、新撰萬葉、本集におなじ、六帖形見貫之として、二三の句、袖にこきいれてとめたらば」とあり、家集には見えず

題しらす　よみ人志らす

山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそわれみはやさむ

猿丸大夫集に、山里にまかりけるに櫻のさきたるを見て」と題して出せり、活字本もおなじ

題しらす　よみ人志らす

やま櫻わかみにくれははるかすみ峰にも尾にもたちかくしつゝ

紀氏新撰に出づ、本集のごとし

いははしるたきなくもかな櫻花たをりてもこんみぬひとのため

家持集本集におなじ、猿丸大夫集詞書に、はなみにまかれるに、山川の岩に花のせかれたるをみて」とあり、活字本には此詞書なし、六帖さくらに出づ、下の句たをりもてこんみぬ人のため」とあり

櫻の花盛に久しく訪はざりける人の來りける時によみける　よみ人志らす

あたなりと名にこそたてれ櫻花としにまれなるひともまちけり

勢語十七段に出づ、同古寫本活字本おなじ

題しらす　よみひとしらす

をりとらはをしけにもあるか櫻はないさ宿かりてちるまてはみむ

猿丸大夫集、是則集にも出づ、是則集詞書、山ざとの花を見てとあり、結句散るまても見むとせり

さくらの花のさけりけるを云々　みつね

わか宿のはなみかてらにくる人はちりなん後そこひしかるへき

躬恒集に、櫻見にまうでくる人にと詞書して出せり、同家集一本に、わかやどの花のたよりにとふひとはちりなんのちにまことおもはん」とあり

春哥下

題しらす　よみ人しらす

春かすみたなひく山のさくらはなうつるはんとや色かはりゆく

六帖さくらに出づ、作者人丸とあり、柿本集には見えず

まてといふにちらてしとまるものならは何を櫻に思ひまさまし

六帖同上、作者素性とあり、素性集にもいづ、活字本もおなじ

題しらす　よみ人しらす

春ことにはなの盛はありなめとあひみんことはいのちなりけり

六帖花、作者素性とあり、素性集にはみえず、さかりヲにほひとしたり

花のこと世のつねならはすくしてし昔はまたもかへりきなまし

六帖花、作者素性とせれど、これも素性集には見えず

ふく風にあつらへつくるものならはこの一本はよきよといはまし

六帖花に出づ、本集におなじ、素性集に四句、この一枝はとあり

まつ人もこぬもの故にうくひすのなきつる花をゝりてけるかな

六帖鶯に出づ、作者素性とありて、首句まつ人はとし、四句なきつる枝をとせり

ふく風をなきて恨みようくひすはわれやは花に手たにふれたる

六帖鶯、作者みつねとあり、躬恒集には見えず

寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた　藤原おきかさ

さく花は千くさなからにあたなれとたれかは春を恨みはてたる

興風集、素性集、本集に同じ、古寫本首句、さくらはな、結句うらみなれたるとあり

仁和帝の中將のみやすん所の家にて歌合せんとて云々

花のちることやわひしきはるかすみ立田の山のうくひすのこゑ　藤原俊蔭

家持集にも見えて、わひしきをかなしきとしたり、活字本には見えず

題しらす　よみ人しらす

こまなめていさみにゆかん故郷はゆきとのみこそ花のちるうめ

紀氏新撰、六帖ふるさとに出てゝ本集におなじ

今もかもさきにはふらんたちはなの小島か崎のやまふきのはな

六帖山吹に出づ、猿丸大夫集、家持集にもいづ、四の句三書共にこじまの崎とあり

はるさめににほへる色もあかなくに香さへなつかし山吹のはな

六帖春の雨に出づ、猿丸大夫集、家持集、紀氏新撰にも出づ、皆本集におなじ

山吹はあやなくさきそ花みむとうゑけんきみかこよひこなくに

六帖山吹に出づ、あやなくチあやなな、うゑけんチうゑてしとせり

蛙なくゐてのやまふきちりにけり花のさかりにあはましものを

六帖山吹、作者貫之とせり、紀氏新撰には下の句、あはましものを花のさかりに」とあり

夏哥

題しらす　よみ人しらす

わか宿の池のふちなみさきにけり山ほとゝきすいつかきなかむ

六帖藤に出でゝ作者人丸とあり、柿本集にも出づ、みつね集にも入たり、三の句さきしより、結句またぬひぞなき」とあり、紀氏新撰結句、いまやきなかんとあり

さつきまつやま郭公うちはふきいまもなかなんこぞのふるこゑ

六帖郭公に出づ作者みつねとあり、紀氏新撰、和歌色葉集みな本集の如く、よみ人しらすとせり、猿丸大夫集にも入たり、活字本おなじ

五月まつはなたちはなの香をかけは昔のひとのそてのかそする

六帖立花、作者いせとせり、伊勢集にも入たり、紀氏新撰伊勢物語六十段にも見ゆ

今朝來なきいまたたひなる郭公はなたちはなにやとはからなん

六帖橘に出づ、作者千里とせり、伊勢集にも見ゆ、活字本おなじ

ほとゝきすなかなく里のあまたあれは猶うとまれぬ思ふものから

勢語三十三段、猿丸大夫集にも出づ、活字本またおなじ

思ひいつるときの山のほとゝきすからくれなゐに振出てそなく

紀氏新撰おなじ

あしひきの山ほとゝきすおりはへて誰か勝ると音をのみぞなく

和哥色葉集おなじ

今さらに山へかへるなほとゝきす聲のかきりはわかやとになけ

紀氏新撰おなじ

やよやまてやま郭公ことつてむわれよのなかにすみわひぬとよ　みくにのまち

六帖郭公に出づ、下の句すみわひぬべしとせり、小町集にも入たり

題しらす　よみ人しらす

こその夏なきふるしてしほとゝきすそれかあらぬか聲の變らぬ

寛平御時后宮歌合、新撰萬葉集にも見えたり

ほとゝきすのなくをきゝてよめる　つらゆき

さみたれのそらもとゝろに郭公なにをうしとかよたゝなくらむ

六帖郭公に出づ、作者貫之とあれど同集には見えず、家持集に入たるは錯なるへし

山に時鳥のなけるをきゝて　つらつき

郭公ひとまつやまになくなれはわれうちつけにこひまさりけり

貫之集六に出づ、本集に同じ、活字本には結句、こひまさるなり」とあり、また家持集にほとゝぎすひとりやまべになくなればわれうちつけにこひせらるはた」とあるにも似たり

秋哥上

題しらす　よみ人しらす

わかせこか衣のそてをふきかへしうらめつらしき秋のはつかせ

六帖初秋に出づ、作者みつねとあり、六帖、秋衣にも出でたれど、そこには作者なし、紀氏新撰に、わぎもこがとあり、家持集にも入たる、本集におなじ

昨日こそさなへとりしかいつのまにいなはそよきて秋風そふく

六帖秋立日に出でゝ作者貫之とあり、紀氏新撰にも出でたり

久方のあまのかはらのわたしもり君わたりなはかちかくしてよ

六帖七日のよに出でゝ作者友則とせり、友則集には見えず、活字本おなじ

あまのかはもみちを橋にわたせはや棚機つめの秋をしもまつ

六帖七日のよに出でゝ作者人麿とせり、柿木集には見えず、活字本もおなじ

こひ／＼てあふ夜は今宵あまの川きりたち渡りあけすもあらなん

紀氏新撰本集におなじ

寛平の御時なぬかのよ云々　こものり

あまのかは淺瀨しら波たとりつゝ渡りはてねはあけそしにける

家持集本集に同じ、友則集には見えず、六帖七日の夜に出でゝ友則とせり、また兼輔朝臣集にも入たり、詞書、七月七日歌よみけるところにいきて」とありて、下の句、わたしはてなばあけぞしにける」とあり

題しらす　　よみ人しらす

このまよりもりくる月のかけみれは心つくしのあきはきにけり

六帖秋の月に出づ、紀氏新撰、小町集他本歌十一首の中に出づ、活字本もおなじ

おほかたの秋くるからにわか身こそ悲しきものと思ひしりぬれ

猿丸大夫集、赤人集共におなじ、大江千里句題和歌句、秋來只識此身哀とあり

わか爲にくる秋にしもあらなくに虫のねきけはまつそかなしき

六帖虫に出づ、寛平中宮歌合、新撰萬葉、紀氏新撰共におなじ

獨ぬる床はくさ葉にあらねともあきくるよひはつゆけかりけり

六帖床、作者そせいとありて、首句ふしてぬるとせり。淸正集は本集におなじ

これさだのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねと秋のよそもの思ふことのかきりなりける

紀氏新撰、宗于集にも出づ、本集とおなじ

題しらす　　讀人しらす

白雲にはねうちかはしとふかりの數さへみゆるあきのよのつき

六帖秋月、紀氏新撰も同じ、新撰萬葉かすチかげ、秋のよの月チ秋の月かなとしたり

さよなかとよはふけぬらし雁かねの聞ゆるそらに月わたるみゆ

人麿集、上の句、このよらはさよふけぬらし」とあり。萬葉九本集におなじ、活字本柿本集には初句此宵は、結句月立ち渡るとせり

秋萩も色つきぬれはきり〴〵すわかねぬとこやよるはかなしき

猿丸大夫集下の句、わが身のごとくものは悲しきとせり、活字本おなじ

あきのよはつゆこそ殊にさむからし草村ことにむしのわふれは

六帖虫に出づ、本集に同じ

君しのふくさにやつるゝふる里はまつ虫のねそかなしかりける

六帖まつむしに出たり、本集に同じ

秋のゝにみちもまとひぬまつ虫のこゑするかたに宿やとらまし

紀氏新撰おなじ

あきのゝに人まつ虫の聲すなりわれかとゆきていさとふらはん

家持集に出づ、本集に同じ、活字本も亦然なり

日暮のなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかけにそありける

猿丸大夫集、詞書に、ものへまかるみちにひぐらしの鳴はべれば、ふみ山にてとあり、三十六人撰にも猿丸大夫の歌のうちに出されたり

ひくらしのなく山さとの夕ぐれは風より外にとふひともなし

紀氏新撰、小町集にも見ゆ

わか門にいなおほせ鳥のなくなへにけさふく風にかりはきにけり

六帖稲負背鳥に出づ、作者人丸とあれど、家集には見えず

春かすみかすみていにしかりかねは今そなくなるあさ霧のうへそ

紀氏新撰おなじ、六帖雁に出づ、作者人丸とあり、公忠朝臣集にも入る、

夜をさむみ衣かりがねなくなへにはきの下葉もうつろひにけり

六帖秋萩、作者人まろとあり、人丸集にも出づ、新撰萬葉本集におなじ、紀氏新撰結句いろづきにけり」とあり、忠峯集これに同じ、但し首句風さむみ」とせり

かりのなきけるをきゝてよめる　　みつね

うき事をおもひつらねて雁かねのなきこそわたれ秋のよな〳〵

六帖雁、作者本集の如し、伊勢集にも入りたり

奥山にもみちふみわけなくしかのこゑきく時そあきは悲しき

寛平御時后宮哥合、新撰萬葉秋に出づ、三十六人撰、猿丸大夫歌とす、猿
丸大夫集詞、鹿のなくをきゝて」とあり。日本風土記に題を鹿悲紅葉とし
て多委陽脉尼木蜜之勿蜜外計乃姑失革那可葉吉古禿計話阿氣所革乃失氣
秋はきにうらひれをれは足ひきの山したとよみしかのなくらむ

六帖鹿、作者人まろとし、一二の句いもにわかうらこひ」とす
あき萩をしからみふせてなく鹿のめにはみえすて音のさやけさ

六帖鹿、作者人まろとして、あき萩にしがらみかけて、又下の句、こゑ
きゝつゝや山田もるらん」としたり
あきはきのしたは色つくいまよりや獨りある人のいねかてにする

紀氏新撰、道風秋萩帖いまよりぞとあり
なきわたる雁のなみたやおちつらん物思ふやとの萩の上のつゆ

紀氏新撰、新撰朗詠露、秋萩帖にも出づ

はきのつゆ玉にぬかんと取れはけぬよしみん人は枝なからみよ

六帖秋萩、作者奈良のみかごゝせり、家持集四の句みむ人は猶とあり
をりてみはおちそしぬへき秋はきのえたもたわゝにおける白露

六帖露、四の句枝もとをゝにとあり、家持集は本集に同じ
はきか花ちるらんをのゝ露霜にぬれてをゆかんさ夜はふくとも

猿丸大夫集、詞、女にとあり、家持集にも出づ
百草のはなのひもとくあきのゝに思ひたはれんひとなとかめそ

六帖野邊に出づ、四の句たはれんヲみたれんとしたり、小町集は本集に
同じ
月くさに衣はすらんあさつゆにぬれての後はうつろひぬとも

萬葉集七、拾遺雜上、六帖つきくさ等に出づ

秋哥下

秋の歌合しける時によめる　紀よしもち

もみちせぬときはの山はふくかせの音にや秋をきゝわたるらん

六帖山に出づ、小町集にも見えたり

題しらす　よみ人しらす

かみなつき時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神なひの森

紀氏新撰冬の部にいれたり、家持集上の句、我かごのわさだもいまだかりあへぬに一としたり

ちはやふる神なひ山のもみち葉におもひはかけし移ろふものを

六帖社、作者やかもちとせり、紀氏新撰にも出づ

あきのつゆ色々ことにおけはこそやまのこのはの千種なるらめ

新撰萬葉、色〳〵ことにチ色殊々、このはのチ黄葉裳としたり

やまとのくにゝまかりける時云々　きのとものり

たかための錦なれはかあきゝりのさほの山邊をたちかくすらん

友則集本集に同じ、又家持集一本に入たれど、活字本には見えず

寛平御時きさいのみやの歌合のうた　よみ人しらす

ちらねともかねてそ惜しきもみちはゝ今そかきりの色とみつれは

新撰萬葉秋にも出づ

是貞のみこの家の歌合のうた　よみ人しらす

秋霧はけさはなたちそさほ山のはゝそのもみちよそにてもみむ

六帖柞に出づ、二の句たゝずもあらなん、結句よそながら見むとあり、新撰萬葉、さほやまを龍田山としたり、友則集にも入たり本集におなじ、活字本には、初句あさ霧はとせり

色かはるあきの菊をは一とせにふたたひ匂ふはなとこそみれ

紀氏新撰おなじ、六帖菊、作者よつなとあり

題しらす　よみ人しらす

さほ山のはゝそのもみちちりぬへみよるさへみよとてらす月影

六帖柞、作者ならのみかど、腰の句ちりぬべきとせり、紀氏新撰、家持

集にも入たり、活字本とおなじ

立田川もみちみたれてなかるめりわたらはにしき中やたえなむ

家持集詞書に、冬天皇立田川のわたりに御幸ありけるに、御供にまゐりてとあり、紀氏新撰にも出づ

たつたかはもみち葉なかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし

六帖もみぢ作者人まろとあり、柿本集に、帝立田川のわたりにおはします御供に仕へまつりてとあり、紀氏新撰、金玉集共によみ人しらずとせり

戀しくは見ても忍はんもみちはをふきなちらしそ山おろしの風

六帖山おろしに出づ作者せきをとあり、紀氏新撰この集に同じ

藤原せきを

みやつかひ久しう云々

おくやまの岩垣もみちぢりぬへしてるひのひかり見る時なくて

六帖てる日に出でゝ腰の句ちりぬべくとせり、家持集にはべしチべみとして、結句みるよしもがなとしたり

題しらす

よみ人しらす

秋はきぬもみちは庭にちりしきぬ道ふみわけてとふひとはなし

猿丸大夫集にも出づ、二三の句もみぢは宿にふりしきぬとせり、活字本おなじ

ほにもいてぬ山田をもるとふち衣いなはのつゆにぬれぬ日はなし

六帖露に出づ、猿丸集ふちころもチからころもとしたり、活字本は本集に同じ

つらゆき

秋のはつる心を云々

年毎にもみちはなかすたつた川みなとやあきのとまりなるらん

貫之集もみちばのながるゝときはたつたがはみなとよりこそあきはゆくらめ」とあり、活字本おなじ

冬哥

題しらす　　　　　　よみ人しらす

たつたかは錦をりかくかみなつきしくれの雨をたてぬきにして

紀氏新撰おなじ、六帖かみな月に出てゝ、川を山としたり、家持集首句チさほ山にとせり

大空のつきのひかりしきよけれは影見しみつそまつこほりける

六帖冬月に出づ、光のチ光し、きよチさむとしたり、新撰萬葉もおなじ

ゆふされは衣手さむしみよしのゝよしのゝ山にみゆきふるらし

六帖雪に出づ、首句夕ぐれは、四の句、高きみ山、家持集にはたかまの山とあり

ふるゆきはかつそけぬらし足引のやまのたきつせ音まさるなり

六帖雪に出づ、おとを聲としたり

ふる里はよしのゝやまし近けれはひとひもみ雪ふらぬひはなし

六帖みゆきに出づ、紀氏新撰に結句ふらぬひぞなきとあり

わかやとは雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

六帖宿に出づ、一本に腰の句、道ぞなきとせり

けぬかうへに又もふりしけはる霞たちなはみゆきまれにこそ見め

六帖雪に出づ、紀氏新撰おなじ

うめのはなそれともみえす久方のあまきる雪のなへてふれゝは

六帖雪に出づ、人丸集、三十六人撰同じ、家持集、上の句、山の上のさやかにみえずとせり、拾遺集春これにおなじ、作者人丸とあり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　　よみ人しらす

雪ふりてとしのくれぬる時にこそつひにもみちぬ松もみえけれ

寛平中宮歌合にもよみ人しらずとす、宗于集にもみゆ、新撰萬葉冬に出づ、四の句もみぢぬチみどりの」とせり、六帖年のくれ、本集におなじ

としのはてによめる　　　在原元方

あら玉のとしのをはりになる毎にゆきも我身もふりまさりつゝ

六帖しはすに出づ、作者これのりとす、三の句なる時はとせり

賀哥

題しらす　　よみ人しらす

わか君はちよにやちよにさゝれ石のいはほとなりて苔のむすまて

六帖祝、紀氏新撰ともに、やちよにヲましせをとしたり

海津見のはまのまさこをかそへつゝ君かちとせのあり數にさむ

紀氏新撰にも出づ、歌本集と同じ

しほの山さしてのいそにすむ千鳥君かみよをはやちよとそなく

紀氏新撰、伊勢集、六帖祝にも出づ、うた本集の如し

よし見ねのつねなりかよそちのかに云々

そさい法師

萬代をまつにそきみをいはひつる千歳のかけにすまんとおもへは

素性集に出づ、六帖祝に見ゆ、作者つらゆきとせり、誤なるへし、きみをいはひつるヲとしをいのりつるとしたり

山たかみ雲ゐにみゆるさくら花こゝろのゆきてをらぬひそなき　みつね

躬恒集にも出づ、題本集に同じ、日本風土記、陽脉大革蜜枯木以尼蜜由而索古頼法乃箇々路那由氣天和頼奴虚木乃矢とせり

離別歌

題しらす　　よみ人しらす

すかるなくあきの萩原朝たちてたひゆくひとをいつとかまたん

六帖ぬさに出づ、結句をしくもあるかなとあり

をのゝちふるかみちのくにのすけにまかりける時云々

たらちねの親のまもりとあひそふる心はかりはせきなとゝめそ

六帖おやに出づ、作者兼輔とあるは誤なるへし

あつまのかたへまかりける人に云々　いかこのあつゆき

思へともみをしわけねはめにみえぬ心をきみにたくひてそやる

中院本伊勢集詞書、ものへゆくひとに」とありて、首句もろともにとせる歌あり、これといとよく似たり

題しらす　　　　よみ人しらす

あかすして別るゝそてのしら玉はきみか形見とつゝみてそゆく

長門本平家物語十四、皇后宮亮經正と、仁和寺覺法親王御前の條に、宮みなみだをおさへさせ給ひ、「云々とて、宮のみうたのさまにかきたれど、たゞ此古歌を誦せさせ給ひしなるべし

みなもとのさねかつくしへゆあみせんとてまかりけるに云々

しろめ

命たにこゝろにかなふものならはなにかわかれの悲しからまし

紀氏新撰、金玉集、大和物語おなじ、日本風土記、心命相違と題して、一那七打尼箇々路尼客乃不木那乃賴白南尼革外界里那革乃失革而別記とあり、六帖別に出づ、歌本集に同じ

羇旅哥

題しらす　　　　よみ人志らす

都いてゝけふみかのはら和泉河かはかせさむしころもかせやま

六帖雜衣に出づ、紀氏新撰にも見ゆ

北へゆくかりそなくなるつれてこし數はたらてそ歸るへらなる

中院本伊勢集、紀氏新撰にも出づ、共に本歌と同じ

物名

志をに　　　　よみ人しらす

ふりはへていさ故郷の花みんとこしをにほひそうつろひにける

六帖しをにに出づ、作者貫之とあるは誤なるべし

かみやかは　　　　つらゆき

ぬは玉のわかくろかみやかはるらん鏡のかけにふれるしらゆき

拾遺集雜秋にも入たり、貫之集にも出づ、二三の句共に吾黒髪に年くれてとあり、活字本おなじ

戀歌一

題しらす　　　　　　　　　　　よみひと志らす

ほとゝきすなくや五月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

紀氏新撰にも出づ、歌本集に同じ

しるしらぬ何かあやなくわけていはむ思のみこそしるへなりけれ

本集に、右近の馬場のひをりの日むかひにたてりける車の下簾より女の顔のほのかに見えければ、在原業平朝臣、見ずもあらず見もせぬ人の云々とあるかへし歌なり、勢語九拾九段、六帖雜思等に出づ、歌皆おなじ

かた糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせむ

六帖たまのをに出づ本集の如し、是則集にも見ゆ、活字本おなじ

夕くれはくものはたてにものそおもふあまつ空なるひとをこふとて

六帖雲に出づ、紀氏新撰共に、ゆふされはとしたり

ちはやふる加茂の社のゆふたすきひとひも君をかけぬひはなし

六帖社に出づ、紀氏新撰、結句、ひそなきとしたり

わかこひはむなしき空にみちぬらん思やれともゆくかたもなし

紀氏新撰、金玉集にも出づ、六帖戀、腰の句みちぬらしとせり、本集一本も然り

夕つく夜さすやをかへの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

六帖夕月夜に出づ、六帖一本には首句、あさひこが、松のはチ松かえ、いつともわかぬチいつともしらぬとしたり、猿丸大夫集首句、六帖の如し

あしひきのやました水の木かくれてたきつ心をせきそかねつる

紀氏新撰、こがくれてチうづもれて、結句かねつるチかねぬるとしたり、六帖水、作者源よしの朝臣とせり、此うたを後撰集にもいれて、詞書に

女のもとにつかはしけるよしの朝臣、返し、よみ人しらず「木隠れてたきつやまみづいづれかはめにしもみゆるおとにこそきけ」とあり

よしの川いはきりとほしゆく水の音にはたてしこひはしぬとも

六帖いはほに出づ、首句みよしのゝとせり、家持集本集におなじ

山たかみしたゆく水のしたにのみなかれてこひん戀は志ぬとも

六帖人しれぬに出づ、同古寫本にしげる木の下ゆく水云々とあり

おもひいつる常磐の山のいはつゝじいはねはこそあれ　しきものを

紀氏新撰にも出づ、歌本集におなじ

人しれす思へはくるしくれなゐのすゑつむ花のいろにいてなん

六帖紅に出づ、一本結句、色に出ばやとせり

夏なれは宿にふすふる蚊遣火のいつまてわか身したもえにせん

紀氏新撰に首句ゆふされば、とあり、六帖火に出づ、初句夏くればとせり

せしとみたらし川にせしみそき神はうけすそなりにけらしも

紀氏新撰、金玉集、作者業平とありて、結句なりにけるかなとせり

何怜てふことたになくはなにをわは戀の亂れのつかね緒にせん

紀氏新撰にも見ゆ、歌本集におなじ

思ふにはしのふることそまけにける色にはいてしと思ひしものを

六帖人にしらるゝに出づ、活字本おなじ

わか戀はひとしるらめやしきたへの枕のみこそしらはしるらめ

六帖枕に出づ、我戀を人しらめやも」とあり、紀氏新撰に四の句、まくらばかりぞとせり

あさちふのをのゝ篠原しのふれと人しるらめやいふひとなしに

六帖野に出づ、作者人まろとあり、下句いまはしらめやとふ人なしにとせり、紀氏新撰おなじ

思ふとも戀ふともあらんものなれやゆふてもたゆく解る下紐

六帖ひもに出づ、紀氏新撰、元良親王集、詞がきに、あひたまひて後宮

とあり、腰の句したひもの、結句とけんこをしれとせり

いてわれを人なとかめそ大船のゆたのたゆたにもの思ふころそ

六帖舟に出づ、結句物思ふころをとせり

いせの海につりするあまのうけなれや心ひとつをさためかねつる

六帖思ひ煩ふに出づ、歌本集におなじ

いせのうみのあまの釣縄うちはへて苦しこのみやおもひわたらん

六帖つりに出づ、くるしチこひしとせり、紀氏新撰には、つりなはチたくなはとしたり

たねしあれは岩にも松はおひにけりこひをしこひは逢はさらめやは

六帖年經ていふに出づ、腰の句おひぬるをとあり

あさな〱たつ川霧のそらにのみうきて思ひのある世なりけり

六帖霧に出づ、歌本集におなじ

よひ〱に枕さためんかたもなしいかにねし夜そ夢にみえけん

紀氏新撰に首句こひ〱てとし、六帖枕に出でて、首句夕さればとせり

戀しきに命を代ふるものならは死にはやすくそあるへかりける

紀氏新撰にも出づ、歌本集におなじ

しのふれは苦しきものをひとしれすおもふてふこと誰にかたらむ

紀氏新撰おなじ、六帖人しれぬに出づ、中院本もおなじ

こん夜にもはやなりなゝん目のまへにつれなき人を昔とおもはん

紀氏新撰同じ、六帖こん夜に出づ、猿丸大夫集にも見ゆ

つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまてなけきつるかな

新撰萬葉、こふとてチまつとて、こたへするまてチおとのするまてとしたり、六帖山彦に出づ、歌本集におなじ

ゆく水にかすかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

勢語五十七段にも出づ、本集の如し

人をおもふ心われにもあらねはや身のまとふたにしられさるらむ

宗于集に出づ、二の句心は我にとせり、活字本三の句あらなくにとあり
戀死ねとするわさならし射干玉の夜はすからに夢にみえつゝ
六帖夢に出づ、作者敏行とあり
戀すれはわか身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ
六帖思ひやすに出づ、新撰萬葉にはわがみぞかげとなりにけるとあり
篝火のかけとなるみのわひしきは流れてしたにもゆるなりけり
六帖夜河に出づ、作者つらゆきとあり
あしかものさわくいり江の白浪のゑらすや人をかくこひんとは
紀氏新撰、六帖鴨に出づ、人麿集、上の句あしかもの入てなくねのしら
すげのとあれど、如何あらん、いと〳〵うたがはし
人しれぬおもひを常にするかなる富士の山こそわかみなりけれ
六帖人しれぬに出づ、伊勢集に、人ゝれずおもひするがのふじのねは、
わがごとやかく絕ずもゆらんとあるはいとよく似たれども、これにはあ
らずかし
あふさかの關になかるゝいはしみついはて心におもひこそすれ
六帖いはで思ふに出づ、下の句いはでしもこそこひしかりけれ」とせり
うちわひてよははんこゑに山彦のこたへぬ山はあらしとそおもふ
貫之集に出づ、六帖山彦にも出づ、作者貫之とあり、四の句こたへぬ空
とせり
こゝろかへするものにもか片戀はくるしきものと人にしらせん
紀氏新撰もおなじ、六帖片戀に出たる「片戀は苦しき物とみこもりの神
にうれひて知らせてしがな」とある歌と、そのさま相似たり
餘所にしてこふれは苦しいれひものおなし心にいさむすひてん
六帖紐に出づ、宗于集詞書に、ひさしくたいめせぬころ、つらゆきがも
とより」とあり、類從本活字本共に此詞書なし
夏虫の身をいたつらになすことも一つおもひによりてなりけり

六帖夏虫に出づ、作者、ふかやぶとせり

いつとてもこひしからすはあらねども秋の夕へはあやしかりけり

小町集に、あやしかりけり秋のゆふくれとあり、活字本おなじ

秋の田の穂にこそひとをこひさらめなとか心にわすれしもせむ

六帖秋田に出づ、歌本集におなじ

秋の田の穂のうへをてらすいなつまの光のまにもわれやわする〻

六帖稲妻に出づ、結句、君ぞこひしきとあり

戀哥二

みふのた〻みね

かきくらしふる白雪のしたきえにきえてものおもふ頃にもあるかな

忠岑集にも見ゆ、六帖雪に出で、下の句、戀うせねとや人のつれなき」とあり

藤原おき風

志ぬる命いきもやすると心見に玉のをはかり逢はんといはなん

六帖玉のをに出づ、結句あひみてしがなとあり、續後撰戀も同じ、新撰萬葉、首句、きえぬべき命もいくや」とせり、貫之集本集におなじ

よみ人志らす

わりなくも寢ても覺めても戀しきかこ〻ろをいつちやらは忘れん

寛平中宮哥合本集におなじ、六帖戀に出でて、首句わりなくぞ、腰句こひらる〻こしたり、新撰萬葉心チうらみとしたり

こひしきにわひてたましひ惑ひなは空しきからの名にやのこらん

寛平中宮哥合、新撰萬葉も本集におなじ、六帖戀に出づ、腰句出ていなばとしたり

題しらす　藤原た〻ふさ

いつはりの涙なりせはからころもしのひに袖はしほらさらまし

六帖衣に出づ、後撰、後六々撰共に首句チなほざりのとしたり

これさたのみこの家の歌合のうた　　よみ人しらす

秋なれは山とよむまてなく鹿にわれおとらめやひとりねるよは

六帖ひとりねに出づ、作者人まろとせるは非ならむ

題しらす　　つらゆき

あきの野にみたれてさける花の色のちくさに物をおもふころかな

六帖秋草に出づ、二の句みたれてチちくさにとし、下の句のちくさにチみたれて」としたり

わか戀はしらぬ山路にあらなくに惑ふこゝろそわひしかりける　　つらゆき

六帖戀に出づ、下の句などかこゝろのまどひけぬべきとあり、貫之集腰句、あらねどもとせり、みつね集に、我こひはしらぬ道にもあらなくにまどひわたれどあふひともなし」とある、全く似たる歌なりかし

みつね

賴めつゝあはて年ふるいつはりに懲ぬこゝろを人はしるらん

後撰集戀五に出でゝ、作者なりひらとあり、業平集にもみゆ、結句人はしらなんとしたり

戀哥三

題しらす　　よみ人しらす

徒にゆきては來ぬるものゆゑに見まくほしさにいさなはれつゝ

六帖くれどあはずに出づ、作者人まろとあれど、いかゞあらむ、勢語六十五段にも見ゆ

あはぬ夜のふる白雪とつもりなはわれさへ共にけぬへきものを

六帖雪に出づ、作者人まろとす、柿本集も本集におなじ

ぬはたまの闇のうつゝはさたかなる夢にいくらも優らさりけり

六帖夢に出づ、作者敏行とせり、金玉集にも見えたり

さ夜ふけて天の戸わたる月かけにあかすも君をあひみつるかな

六帖はじめてあへるに出づ、作者坂上郎女とせり、結句あかずも人をあひ見つるかな」としたり

君か名も我名もたてし難波なる見つともいふな逢ひきともいはし

六帖くち固むに出づ、歌本集に同じ

名取川瀬々のうもれ木顯れていかにせんとそあひみそめけん

六帖人しれぬに出づ、歌本集におなじ

こひしくはしたにを思へむらさきのねすりの衣いろにいつなゆめ

六帖紫に出づ、上の句おもふとも下にやあはんとせり、和歌色葉集本集におなじ

やましなのおとはの山の音にたに人のしるへくわかこひめかも

本集一本に、二の句音羽の瀧のとあり

大方はわかなもみなとこき出なん世をうみへたにみるめ少なし

六帖みるめに出づ、下の句人をみるめもおきにこそかれとせり

風ふけはなみうつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬへらなり

人麿集、本集に同じ、六帖松に出づ、作者人まろとあり、二の句、波こす磯のそなれ松とせり、活字本柿本集も同じ

池にすむ名を鴛鴦のみつをあさみかくるとすれとあらはれにけり

六帖をしに出づ、古寫一本に初句ならびすむとせり

あふことは玉の緒はかり名のたつは吉野の川のたきつせのこと

六帖玉のをに出づ、作者貫之とあれどいかゞあらん

村鳥のたちにしわか名いま更にことなしふともしるしあらめや

六帖鳥に出づ、紀氏新撰、和歌色葉集もおなじ

戀哥四

題しらす　よみ人しらす

みちのくの淺香の沼のはなかつみかつみる人にこひやわたらん

紀氏新撰、人にチ人をとあり、六帖花がつみに出で、下の句、かつ見る

人の戀しきやなぞ」とせり

あひみすは戀しきこともなからまし音にそひとをきくへかりける

六帖こひに出づ、古寫一本に、あひ見ねば戀しき宵もなかるべしとあり

藤原たゝゆき

君といへはみまれみすまれ富士の嶺のめつらしけなくもゆるわか

友則集にも出でたり、活字本おなじ

よみ人しらす

岩間ゆくみつの白浪たちかへりかくこそはみめあかすもあるかな

六帖二人をりに出づ、中院本六帖に上句、山影の岩間の水のこもり居てとあり

伊勢の海人の朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

六帖みるめに出づ、首句いせのうみのとあるは、もと海字をアマと訓じたるに心づかずして誤訓せしものなるべし

伊勢

夢にたにみゆとは見えし朝な／＼わか面影にはつる身なれは

伊勢集、六帖面影に出づ、一本ゆめにてもみつとはいはじとあり

寛平御時きさいの宮歌合のうた

おもふてふ言の葉のみや秋を經ていろもかはらぬ物にはあるらん

寛平中宮哥合戀二十番のうち、未の一首今本かけたり、このうたなるべし

さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらん宇治の橋姫

和哥色葉集に出づ、歌本集と同じ

君やこん吾やゆかんのいさよひにまきの板戸もさゝすねにけり

和哥色葉集本集に同じ、六帖戸に出で、三の句以下チやすらひに、槙の板戸をさゝてとしたり

月夜よし夜よしと人につけやらはこてふにたり待たすしもあらす

六帖人をよぶに出で、三の句つけやらばとせり

きみこすは閨へもいらしこ紫わかもとゆひに霜はおくとも

六帖霜に出で、作者たゞふさとせり

宮城野のもとあらのこはぎ露をおもみ風をまつごときみをこそまて

六帖萩、又人をまつにも出でたり

あな戀し今も見てしかやまかつのかきほにさけるやまと撫子

六帖撫子に出で、作者むねゆきとせり、紀氏新撰にはさけるヲおふるとしたり

かくこひんものとはわれも思ひにき心のうらそまさしかりける

六帖わするに出でて、上句わすれなんものとはかねて思ひきや」とあり、中院本おなじ

天の原ふみとゞろかしなるかみもおもふ中をはさくるものかは

六帖なるかみに出たり、本集におなじ

梓弓ひきのゝつゝらすゑつひにわかおもふ人にことのしげけむ

六帖弓に出づ、作者ならのみかどとせれどいかゞあらん

須磨の海人の鹽やくけむり風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり

勢語百段また六帖鹽に出づ、首句いせの海士のとあり

玉かつらはふきあまたになりぬれはたえぬ心のうれしげもなし

勢語百十八段、六帖こと人を思ふに出づ、三の句、なりぬればヲありといへばとしたり

たか里によかれをしてか郭公たゞこゝにしもねたるこゑする

六帖ほとゝぎす新撰萬葉にも出づ、四の句たゞこゝにのみとせり

いて人はことのみぞよき月草のうつしこゝろは色ことにして

猿丸大夫集、詞書、あだなる人のさすがにたのめて、つれなくのみ侍りければ」として、結句あひもおもはずとあり、活字本おなじ

あかてこそおもはん中ははなれなめそをたに後のわすれ形見に

六帖形見に出づ、三の句わかれなめとあり

忘れなんと思ふこゝろのつくからにありしよりけにまつそ悲しき

勢語二十一段に出づ、首句わするらん、腰の句うたがひに、結句ものぞ悲しきとあり

兼輔集女として此歌を載せ、返し「わすれなばたれかは人をうらむべきうきにおくれてしるはわれかは」とあり、活字本もおなじ

わすれなん我をうらむな郭公ひとのあきにはあはんともせす

くれなゐのはつ花そめの色ふかくおもひしこゝろわれ忘れめや

六帖紅に出づ、色ふかくチ色ごろも、われわすれめやチわれはわすれず」としたり、中院本古寫本三の句本集におなじ

六帖あさちに出づ、紀氏新撰おなじ

おもふよりいかにせよとか秋風になびく淺茅のいろことになる

ちゝの色にうつろふらめと知らなくにこゝろし秋の紅葉ならねは

新撰萬葉おなじ

めつらしき人をみんとやゑりもせぬわか下紐のとけわたるらむ

六帖紐に出づ、結句とけつゝあらんとあり、中院本おなじ

かけろふのそれかあらぬか春雨のふる日となれは袖そぬれぬる

六帖かけろふに出づ、四句ふるひとみればとせり、奥義抄結句ひぢぬるとあり

堀江こく棚なし小ふねこきかへりおなし人にや戀ひわたりなん

六帖江に出づ、首句ほり江チ入江として、結句おなじ人のみおもほゆるかなとせり、中院本古寫本共におなじ

あふまての形見もわれはなにせんに見ても心のなくさまなくに

六帖形見に出づ、われはチいまはとしたり

形見こそいまはあたなれこれなくは忘るゝ時もあらましものを

勢語百十九段、小町集にも出でたり、歌本集の如し、活字本も同じ

戀哥五

五條のきさいの宮のにしのたいに住ける云々

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔のはるならぬわか身ひとつはもとの身にして

業平集本集の如し、活字本おなじ、日本風土記、難中春怨といふ題をおきて、紫氣耶阿頼奴發而、木革失那發而乃頼奴黄俺蜜許多子外木多那蜜尼失天と載せたり

題しらす　　よみ人しらす

はなかたみめならふ人のあまたあれは忘られぬらん數ならぬ身は

六帖かたみに出づ、本集におなじ

うきめのみおひて流るゝ浦なれはかりにのみこそ海人はよるらめ

六帖梅松に出づ、二の句うきてみだるゝとあり

須磨のあまの鹽やき衣を筬をあらみまとほにあれや君かきまさぬ

萬葉集、作者大綱公人主、上の句、いせのあまの鹽やき衣のふぢころも、下の句まとほにしあればいまだきまさぬ、六帖鹽やき衣に出づ、首句、いせのあまの、結句、いまだきまさぬとあり

あひ見ねは戀こそまされ水無瀬川なにゝ深めておもひそめけん

猿丸大夫集おなじ、活字本また同じ

曉の鴫の羽ねかきもゝはかき君かこぬ夜はわれそかすかく

六帖鴫に出づ、和哥色葉集もおなじ

いましはと佗ひにし者をさゝかにの衣にかゝり吾をたのむる

六帖たのむるに出づ、重之集一本にも見ゆ

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわひつゝもねん

六帖人をまつに出づ、紀氏新撰もおなじ

うゑていにし秋田かるまてみえこねはけさ初雁の音にそなきぬる

家持集に出づ、首句うゑてこしとあり

久しくもなりにけるかな住の江のまつはくるしきものにそありける

紀氏新撰まつは苦しきヲまつはちとせのとあり

世の中のひとのこゝろははな染のうつろひやすき色にそありける

六帖つきくさに出づ、三の句はなそめのヲつきくさのとしたり

吾のみや世をうくひすとなきわひん人のこゝろの花とちりなは

小町集に出づ、うた本集に同じ、一本には結句花しちりなば、また花とちりせばともあり

それをたに思ふことゝてわか宿をみきとないひそ人のきかくに

六帖くちがたむに出づ、紀氏新撰、大和物語おなじ

わひはつる時さへものゝかなしきはいつこをしのふ涙なるらん

後撰集戀五に作者伊勢とありて、なみだヲこゝろとしたり、紀氏新撰同じ

荒小田をあらすきかへしかへしても人のこゝろを見てこそやまめ

猿丸大夫集には、下句みてこそやまめ人のこゝろをとあり、活字本同じ

ありそ海のはまの眞砂とたのめしは忘るゝことのかひにそありける

紀氏新撰おなじ、本集一本には、結句數にぞ有けるとせり

わすらるゝ身をうちはしの中たえて人もかよはぬ年そ經にける

本集一本に、四の句人もかよはでとせり、また紀氏新撰に、上の句、はしヲ川として、下の句、こなたかなたに人もかよはずとしたり

なかれては妹脊の山のなかにおつるよしのゝ川のよしやよのなか

紀氏新撰、川ヲ瀧とせり

哀傷哥

時しもあれ秋やは人のわかるへきあるを見るたにこひしきものを　たゝみね

六帖悲に出づ、作者おなじ、上の句ときしまれ秋やは人にとし、下の句、さるはよさむになれるころしもとせり、忠岑集も本集に同じ

女のおやのおもひにて山てらに云々　よみ人しらす

あしひきの山邊にいまはすみその衣の袖のひるときもなし

兼輔集に見えたり、詞書、おやのおもひにて、山寺にこもれるに、いづくにてと人のたつねたりける返事とあり

藤原のとしもとの朝臣の云々　　みはるのありすけ

君かうゑし一むら薄虫の音のしけき野邊ともなりにけるかな

六帖薄、作者いせとせり、歌林良材作者兼藝法師とあり、傍に古十五としるしたるたがへり

題しらす　　よみひとしらす

なきひとの宿にかよはゝ郭公かけてねにのみなくと告けなむ

本集一本に、二の句門にかよはゞとあり、紀氏新撰おなじ

こゑをたにきかて別るゝ玉よりもなきとこにねん人そかなしき

六帖悲に出づ、三の句、玉チわれとし、結句人チ君とせり

雜哥上

よみ人しらす

むらさきの一本ゆゑにむさし野の草はみなからあはれとそみる

六帖紫に出づ、下の句、くさはみながらなつかしきかなとあり、歌林良材には、作者業平として、結句あはれとぞおもふとしたり

わかうへに露そおくなるあまの川とわたる舟のかひのしつくか

勢語五十九段、紀氏新撰四に出づ、本集一本には、わが袖に露ぞかゝれるとせり

思ふとち圓居せる夜はからにしきたゝまく惜きものにそありける

六帖錦に出づ、結句、ものにざりけるとせり、紀氏新撰、二の句、まとゐせるよのとあり

うれしさをなにゝつゝまむ唐ころも袂ゆたかにたてといはましを

六帖衣に出づ、作者つらゆきとせり、紀氏新撰には、結句たゝましものをとあり

かきりなき君かためにと折る花はときしもわかぬ者にそありける

勢語九十八段、首句わがたのむとし、六帖かたみに出でて、二の句、きみがかたみとあり

おそくいつる月にもあるかなあしひきの山のあなたも惜むへらなり

紀氏新撰、本集におなじ、六帖雜の月、又さとに出づ、三の句以下、やまのはのあなたのさともをしむなるべしとあり

あまの川くものみをにてはやけれは光とゝめす月そなかるゝ

八代集抄本、紀氏新撰もおなじ

あかすして月のかくるゝ山もとはあなたおもてそ戀しかりける

八代集抄本、紀氏新撰おなじ

いそのかみふるからをのゝもと柏もとの心はわすられなくに

六帖かしはに出づ、うた本集におなじ

いにしへの野中の清水ぬるけれはもとのこゝろを知る人そくむ

紀氏新撰首句ふるさとのとし、六帖昔あへる人に出でて、本集におなじ

いにしへの倭文の苧環いやしきもよきもさかりはありし者なり

和歌色葉集にもおなじく見ゆ

今こそあれ我もむかしはをとこ山さか行くときもありこしものを

八代集抄本、紀氏新撰共におなじ

世の中にふりぬるものは津の國のなからの橋とわれとなりけり

紀氏新撰、八代集抄本共に同じ

さゝの葉にふりつむ霜のうれを重みもとくたちゆくわか盛はも

六帖雪に出でて、二三の句ふりつむ雪の末を重みとし、結句わが心かなとせり

大あらきの森のした草老ぬれはこまもすさめす苅るひともなし

紀氏新撰本集の如し、六帖森に出でて、作者小野小町とあり、小町集にはみえず

おしてるや難波のみつにやく鹽のからくも我はおいにけるかな

六帖鹽に出てて、二の句なにはの浦にとあり

老らくのこんと知りせは門さしてなしと答へてあはさらましを

六帖翁にいでて、うた本集におなじ

われ見てもひさしくなりぬ住の江の岸のひめ松いく代經ぬらん

六帖社に出づ、紀氏新撰もおなじ

すみよしの岸のひめ松人ならはいく代か經しといはましものを

六帖江に出でゝ、一二の句玉つ島いり江の小松とあり、紀氏新撰おなじ

かくしつゝよをやつくさん高砂のをのへにたてる松ならなくに

紀氏新撰、八代集抄本共におなじ

わたつ海のおきつしほあひにうかふ沫の消えぬものからよる方もなし

六帖沙に出づ、三の句のきえぬヲ絶えぬとせり、紀氏新撰にも出でたり

わたつうみのかさしにさせるしろたへの浪もてゆへるあはち島山

六帖嶋に出でゝ、結句あはぢ島見むとあり、紀氏新撰も本集におなじ

わたの原よせ來る浪のしは／＼も見まくのほしき玉津島かも

紀氏新撰、和歌色葉集にも出づ、紀氏新撰二三の句、よりくるなみのたちかへりとあり

難波かた汐みちくらしあまころもたみのゝしまに鶴なきわたる

六帖嶋に出づ、紀氏新撰には二の句汐みちくればとせり

雜哥下

題しらす　　よみ人しらす

いくよしもあらし我身をなぞもかく海士のかるもに思ひ亂るゝ

六帖藻に出づ、一本に海士のかるもとゝあり、首句いくばくもとし、道風秋萩帖三の句なぞはかくとせり

鴈の來る峯のあさきりはれすのみおもひつきせぬ世の中のうさ

六帖霧に出づ、紀氏新撰もおなじ、土御門院御集に、雁のくるそなたの

そらをなかめてもおもひつきせぬみねのあさきり」とあるは、このうたによらせ給ひしにや

あはれてふ言の葉ことにおく露はむかしをこふる涙なりけり

紀氏新撰おなじ、小町集にも出づ

世の中のうきもつらきも告けなくにまつしるものは涙なりけり

紀氏新撰おなじ、小町集にも出づ

よの中はゆめか顯かうつゝとも夢ともしらすありてなけれは

小町集本集に同じ、金玉集しらずチわかずとせり

よのなかはいつら我身のありてなし哀とやいはんあなうとやいはん

小町集、本集に同じ

山里は物のさひしきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけり　これたかのみこ

紀氏新撰、二の句ものさびしかるとあり

白雲のたえすたなひく峰にたに住めはすみぬる世にこそ有けれ

六帖峰に出づ、作者みつねとせり、小町集にも入たり、貫之集下句、すめばすまるゝ世にぞ有りけるとあり

よのなかは昔よりやはうかりけん我身ひとつのためになれるか　よみ人しらす

紀氏新撰、八代集抄本共に同じ

みよしのゝ山のあなたに宿もかなよのうきときの隠處にせん

紀氏新撰、首句をあしひきのとしたり

いかならん巖の中に住まはかは世のうきことの聞えこさらん

六帖いはほに出づ、結句たづねこざらんとせり、同一本腰の句、すまへばかとしたり、色葉集にも見ゆ

世の中のうけくにあきぬ奥山のこのはにおける雪やけなまし

紀氏新撰おなじ、八代集抄本三の句、この葉にふれるとあり

野とならは鶉となきてとしは經んかりにたにやは君はこせらん

伊勢物語に出づ、うた本集の如し、業平集、六帖鶉に出づ、なきてチなりてとし、きみチひとゝしたり

いさこゝに我世は經なんすかはらや伏見の里のあれまくもをし

六帖里に出づ、紀氏新撰、首句こゝにしてとあり

わか庵は三輪の山本こひしくはとふらひきませ杉たてるかと

紀氏新撰おなじ、六帖門に出づ、首句、わが宿はとせり、またみわのみかたとあるは甚いかゞなり

平さたふん

ありはてぬ命まつまのほとはかりうきことしけく思はすもかな

八代集抄本おなじ、伊勢集にも入たり

題しらす　讀人しらす

荒れにけりあはれ幾代の宿なれや住みけん人のおとつれもせぬ

勢語五十八段おなじ、六帖宿に出づ、作者伊勢とあり

世の中はいつれかさしてわかならん行とまるをそ宿とさたむる

本集一本に下句、ゆき止るをそ宿と定めむとあり

逢坂のあらしの風のさむけれはゆくへしらねはわひつゝそぬる

六帖嵐に出づ、三の句さむければチはやけれどとし、結句ぬるチふるとしたり、紀氏新撰、三句以下、寒ければゆくへもしらずわびつゝもぬるとしたり、按に京極中納言僻案抄云上の三首のうた蟬丸がよめりけるを、古今には作者をあらはさゞりけり、後撰には作者をかけるなりとぞ金吾申されける」とあれど、今の後撰集にはこの三首みえず

風のうへにありかさためぬ塵の身は行方もしらすなりぬへらなり

六帖ちりに出づ、紀氏新撰もおなじ

風ふけはおきつ白浪たつたやま夜半にや君かひとりこゆらん

勢語廿三段、紀氏新撰、金玉集おなじ、大和物語にも見ゆ、六帖雜風に

出づ、作者かぐやまの花のことあり、また山にも出で作者おなじ
たかみそきゆふつけとりか唐衣たつたのやまにおりはへて鳴く
本集一本に結句うちはへてなくとせり、紀氏新撰おなじ、大和物語、猿丸大夫集、詞書、あひしりて侍る女の、人をかたらひて、おもふさまにやあらざりけん、つねになげきたるけしきみえ侍りければ」とあり
わすられんときしのへとそ濱千鳥行方もしらぬあとをとゞむる
紀氏新撰おなじ、六帖ふみに出づ、八代集抄本二の句時しのべとかとせり、活字本おなじ

旅頭哥

題しらす　　よみ人しらす
うちわたすをちかた人にものまうすわれそのそこに白くさけるはなにの花そも
躬恒集一本にはわれの二字なし、六帖せどうかに出づ、うた本集に同じ

返し
春されはのへにまつさく見れとあかぬはなまひなしに只なのるへき花の名なれや
六帖せどうかに出づ、二の句のべにの三字なし
はつせかはふるかはのへにふたもとある杉としをへてまたも逢ひみん二もとある杉
六帖せどうかに出づ、作者みつねとせり、躬恒集には、初瀬河ふるかはのべにとしをへてふたもとある杉またもあひ見む、おもかはりせでとしたり

俳諧哥

題しらす　　よみ人しらす
うめの花みにこそきつれ鶯のひとく〱といとひしもをる
敏行集に出づ、うた本集に同じ

思へともなほうとまれぬはる霞かゝらぬ山のあらしとおもへは

元良親王御集に、一二の句、あはれとはみれごもうとし」とあり

ことならは思はすとやはいひはてぬなそ世の中の玉手襁なる

六帖玉たすきに出づ、首句おもはずばとあり

おもふてふ人のこゝろの隈ことにたち隠れつゝみるよしもかな

六帖雜の思に出づ

思へともおもはすこのみいふなれはいなや思はし思ふかひなし

六帖雜の思に出でて、三の句のいなやチ今はこせり

我をのみおもふといはゝあるへきをいてや心はおほぬさにして

六帖雜の思に出づ

我をおもふ人をおもはぬむくいにやわか思ふひこはわれをおもはぬ

六帖雜の思に出づ、四の句わか思ふ人のとせり

ふかやふ

おもひけん人をそともに思はましまさしや報いなかりけりやは

六帖雜の思に出づ、作者ふかやぶとせり

よみ人しらす

紅に染めしこゝろもたのまれて人をあくにはうつるてふなり

六帖紅に出づ、二の句そめし衣もとし、結句かへると思へばこせり

さかしらに夏はひとまね笹の葉のさやく霜夜をわかひとりぬる

六帖ひとりねに出づ、四の句さやくチそよくとしたり

まめなれと何そはよけくかるかやの亂れてあれと惡けくもなし

古本古寫本等の猿丸大夫集に出づ、丗六人集本の猿丸集にはなし

そへにとて兎すれはかゝり斯すれはあな言知らすあふさきるさに

六帖雜の思に出づ、色葉集にも見ゆ

何をして身のいたつらにおいぬらん年の思はんことそやさしき

六帖雜のおもひに出づ、結句こともやさしくとせり

よを厭ひこのもとことに立よりてうつふしそめの麻のきぬなり
古本六帖衣に出づ、作者素性法師とあれど標注本にはなし、僧正返照集
にもみえて、結句麻のけさなりとせり

御哥所御歌

おほなほらひのうた

あたらしき年のはしめにかくしこそ千年をかねて樂しきをつめ
續日本紀に、作者未詳、下句仕へまつらめ萬代までにとあり、本集の註
書に日本紀には、仕へまつらめよろつよまでにとある日本紀は、續日本
紀の誤なり、催馬樂呂にも新年に見ゆ、續日本紀におなじ

ふるきやまと舞のうた

みつくきの岡のやかたにいもとあれとねての朝けの雪のふりはも
六帖霜に出でて、結句霜のふりはもとせり

神あそひのうた

とりものゝうた

神垣のみむろの山のさかき葉はかみのみまへにしけりあひにけり
六帖かぐらに出づ、首句御垣やとあり、つらゆきのうたの内に入たり、
神樂歌譜さかきにも出づ

霜やたひおけとかれせぬ榊葉のたちさかゆへき神のきねかも
六帖かぐらに出づ、作者貫之とせり、結句神のきねかなとす、神樂歌譜
とりものゝうたに見えたり

まきもくのあなしの山の山人とひとも見るかにやまかつらせよ
六帖社に出づ、四の句人も見るがねとせり、神樂歌葛、首句わぎもこが
とあり

みやまには霰ふるらしとやまなるまさきのかつら色つきにけり
紀氏新撰、金玉集共によみ人しらすとす、神樂歌葛に見ゆ、六帖かぐら
に出でて、つらゆきのうたとせり

陸奥のあたちの檀弓わかひかはすゑさへよりこゑのひく〳〵に

神樂歌弓に出づ

わか門のいた井の清水さと〻ほみひさしくまねはみ草おひにけり

神樂歌片折に出づ、六帖井に出でて、作者家持とあり、古本神樂歌譜、結句みさびゐにけりとす

かへしもの〻歌

あを柳をかたいとによりてうくひすのぬふてふ笠は梅のはなかさ

催馬樂青柳に出づ

東歌

みちのくうた

陸奥はいつくはあれとゑほかまの浦こく船のつなでかなしも

六帖鹽竈に出づ、二の句いづこもあれどとし、四の句まがきの島のとせり、伊勢集もおなじ

阿武隈に霧たちくもりあけぬとも君をはやらしまてはすへなし

六帖霧に出づ、四の句せなをはやらじとせり

みさふらひみかさとまをせ宮城野のこのした露は雨にまされり

六帖露に出づ、貫之の歌とせるはいかゞなり

ひたちうた

筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれと君かみかけにますかけはなし

和歌色葉集おなじ

かひうた

甲斐か嶺をさやにも見しかけゝれなくよこをりふせる小夜の中山

和歌色葉集おなじ

甲斐かねを嶺こし山こしふく風を人にもかもやことつてやらん

和歌色葉集おなじ

いせうた

をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならすもねてかたらはん

六帖なしに出づ、伊勢集もおなじ

墨滅

宗于集おなじ

けふ人をこふるこゝろはおほゐかはなかるゝ水に劣らさりけり

我妹子にあふさか山のしのすゝきほにはいてすもこひ渡るかな

宗于集、人丸集もおなじ

つらゆき

みちしらは摘みにもゆかん住の江の岸におふてふこひわすれ草

人丸集に、いとまあらばさりにきませを、住吉のきしにおひたるこひわすれくさ」とある、そのさまおなじ

撰集考異第二

富永春部撰修
富永孝太郎増訂

後撰和歌集

春哥上

ある人のもとにいまいりの女云々　よみ人しらす

白雲のうへしるけふそはる雨のふるにかひある身とはしりぬる

六帖雨、作者そせいとあり、うた本集におなじ

題しらす　よみ人しらす

かすみたつ春日の野への若菜にもなりみてしかな人もつむやと

新撰萬葉、はるがすみたちいづる野べとあり、興風集には、春霞たなびく野べとせり、活字本おなじ

寛平御時きさいのみやの歌合のうた

ふく風や春たちきぬとつけつらん枝にこもれるはなさきにけり

新撰萬葉おなじ、寛平中宮歌合の今の本にはこのうたみえず

わかせこに見せんとおもひし梅の花それともみえす雪のふれゝは

家持集、赤人集、人麿集共におなじ、金玉集には本集の如くよみ人しらすとし、三十六人撰には作者赤人とせり

きてみへき人もあらしなわか宿の梅のはつはなをりつくしてん

人麿集、上の句、人もあらなくに、結句ちりぬれどよし、家持集、上の句は本集に同しくて、結句は人麿集におなじ。又「きてみべき人もあらじを、わが宿の梅のはつはなをりつくしてん」とある歌もあり

ふく風にちらすもあらなんうめの花わかかりころもひと夜やとさん

六帖かり衣に出づ、三の句、梅花ヲ櫻はなとしたり

梅のはな香をふきかくる春風にこゝろをそめは人やとかめん

六帖雜衣に出づ、二の句かくるヲつくるとし、こゝろヲころもとしたり

春雨のふらは野山にましりなんうめのはな笠ありといふなり

六帖雨、作者貫之或本とありて、野やまヲ山べとしたり

かきくらし雪はふりつゝゑかすかに我家の園にうくひすそなく

萬葉集八に出づ、作者家持とあり、首句うちきらし、結句鶯なくも」とあり、六帖鶯に出でゝ、結句なきつとしたり、拾遺集本集に同じ

鶯のなきつるこゑにさそはれて花のもとにそわれはきにける

古本赤人集に出づ、本集に同じ、大江千里句題和歌に、題鶯音引來花下とあり

君かため山田のさはにゑくつむとぬれにし袖はいまたかはかす

萬葉集十に出づ、下の句、雪げの水に裳のすそぬれぬとあり、赤人集、家持集にも出づ、六帖にも澤に見ゆ、結句ほせごかはかずとあり、また本集一本に今もかはかずとしたり

うめの花ちるてふなへに春雨のふりてつゝなくうくひすのこゑ

六帖鶯に出づ、作者はつせをとあり、伊勢集にも入たり

紅梅の花をみて　みつね

くれなゐに色をはかへて梅の花かそここ〳〵ににほはさりける

新撰朗詠に、作者つらゆきとあり、躬恒集にも見えず、貫之集にもなし

春哥中

花山にて道俗さけたうへけるをりに　素性法師

山もりはいはゝいはなん高砂のをのへのさくら折りてかささん

素性集にも見ゆ、活字本おなじ

おも白きさくらをゝりてともたちのつかはしたりけれは　よみ人しらす

櫻はないろはひとしき枝なれとかたみに見れはなくさまなくに

伊勢集には、作者人とのみありて、詞書に、いとおもしろきさくらををりて、人のがりやりたりければ人」とあり、六帖かたみに出づ、作者よしありの大臣とせり

題しらす　よみひとしらす

櫻花にほふともなく春くれはなとかなけきのしけりのみする

六帖木に出でて、作者伊勢とあり、伊勢集にもみえたり

春來れは木かくれおほきゆふつく夜おほつかなくも花蔭にして

萬葉集十に出づ、初句春されば、結句花かげを山かけとせり、六帖春月に出づ、木がくれを葉がくれとしたり

小貳につかはしける　藤原朝忠朝臣

おほ空におほふはかりの袖もかなはるさくはなを風にまかせし

寛平中宮歌合にみえたり、うた本集におなじ

時しもあれ花のさかりにつらけれはおもはぬ山にいりやしなまし

朝忠集に、作者小貳とありて、返しのうた朝忠なり。さて二の句の花を

秋としたり

春哥下

あれたるところにすみける女云々　よみ人しらす

わかやとに菫のはなのおほかれはきやさる人やあると待つかな

六帖菫に出づ、古一本に下句來宿る人やあらんとぞまつとあり

春花見に出たりけるを見つけて云々　よみ人しらす

春霞たちなから見しはなゆゑになみとめてけるあこのくやしさ

伊勢集に出づ、三の句花ゆゑにチ花なればとせり、六帖文にいで作者伊勢とあり、三四の句花なれどふみこゝし、結句あとぞ嬉しきとす

いつみのくににまかりけるに云々　よみ人しらす

はるふかきいろにもあるかな住の江のそこもみとりにみゆる濱松

六帖松に出づ、作者としゆさとせり、家集には見えず

あひしれりける人の云々　よみ人しらす

われをこそとふにうからめ春霞はなにつけてもたち寄らぬかな

六帖霞に出づ、拾遺集雜春伊勢の歌に、われをこそとふにうからめ、わか宿の花見にだにも、君が來まさぬ」とあると一二の句は似たれど、別歌なるべく覺ゆ

みやつかへしける女のいそのかみといふところ云々　よみ人しらす

かみさひてふりにし里にすむひとは都にゝほふはなをたに見す

赤人集に出づ、うた本集に同じ、千里句題和歌に題不見洛陽花にあり

法師にならんのこゝろありける云々　よみ人しらす

みよしのゝ吉野の山のさくらはな白雲とのみ見えまかひつゝ

紀氏新撰一に出づ、二の句、山邊にさけるとし、結句あやまたれつゝとせり、古今集、春上に出で、作者友則とあり、上句紀氏撰集に同じ、下句雪かとのみぞあやまたれけるとあり

亭子院哥合のうた　　よみ人志らす

山櫻さきぬるときはつねよりも峰のしらくもたちまさりけり

亭子院哥合に、作者興風、或本つらゆきとせり、本集一本に、二の句さきける時は、結句たちまさりぬるとあり

題しらす　　よみ人志らす

わかやとのかけともたのむ藤の花たちより來とも涙にをらるな

伊勢集、詞書、池のつらなる松に藤さける所として、二の句影そと頼むとあり、六帖藤に出て、作者僧正遍昭、續千載集春には作者伊勢とせり

をしめとも春のかきりの今日のまた夕暮にさへなりにけるかな

勢語九十一段には、三の句けふの日のとあり、新撰朗詠には、作者みつねとせり

夏哥

題しらす　　よみ人しらす

けふよりは夏の衣になりぬれと着る人さへはかはらさりけり

寛平中宮歌合に作者源元方、また躬恒ともあり

卯の花のさけるかきねの月清みいねすきけとや啼くほとゝきす

伊勢集に出づ、二の句かきねのチさかりはとしたり

うのはなのかきねある家にて

時わかすふれる雪かと見るまてに垣根もたわにさける卯のはな

六帖歳時卯のはなに出づ、拾遺夏にも同じく見ゆ

題しらす

この頃は五月雨ちかみほとゝきす思ひみたれてなかぬ日そなき

貫之集、本集におなじ

まつひとは誰ならなくに郭公おもひのほかになかはうからむ

亭子院哥合には誰チつねとせり

にほひつゝちりにし花そおもほゆる夏は綠の葉のみしけれは

寛平中宮哥合、本集におなじ

人のもとにつかはしける　　　　藤原安國

あふとみし夢にならひて夏の日のくれかたきをも歎きつるかな

中務集に、作者の名はなくて、また人とのみあり、さて二の句、ゆめを
たのみて、三の句春の日のとありて中務の返し、心してあらましものを
ゆめにてもいかておもなくみえわたるらん」と見ゆ

おもふこと侍けるころほとゝきすをきゝて　　　　よみ人しらす

をりはへて音をのみそなく郭公しけきなけきの枝毎にゐて

伊勢集に出づ、二の句、なきぬべらなりとせり

たいしらす

ふすからに待つそわひしき郭公なきもはてぬにあくる夜なれは

六帖郭公に出づ、作者ふかやぶとし、四の句なく一こゑにとせり

いろかへぬはな橘にほとゝきす千代をならせるこゑきこゆなり

中務集の詞書に、たち花に郭公のなくにとして、下の句ならするこゑそ
きこゆとせり、活字本三十六人集には、四の句千代をかたらふと見ゆ

たひ寝してつまこひすらし郭公かみなひやまにさ夜ふけてなく

赤人集には、夏の雑歌どもを詠すと題せる長歌の反歌にて、初句旅にい
でてとせり

さつきふたつ侍けるにおもふこと侍りて　　　　よみ人志らず

さみたれのつゝける年のなかめにはもの思ひあへる我そわひしき

伊勢集に出づ、活字本伊勢集には四の句物思ひそむるとせり

題しらす

つねもなき夏のくさはにおく露をいのちとたのむ蟬のはかなさ

新撰朗詠洞院后歌合によみ人しらずとし、首句つれもなきとせり、寛平

中宮歌合には、首句はかもなきとありて、結句蟬を虫としたり

わか宿のかきねにうゑし撫子ははなにさかなんよそへつゝみん

万葉集八に出て、上句わがやどにまきしなでしこいつしかも、また下の句よそへヿなぞへとあり、六帖撫子に出づ、二の句咲きし撫子とす、下の句おなじ、作者家持とあり、家持集にはしたにのみこふればくるし、なでし子の花さきでよ、朝な〳〵見ん」とありて、語調いと〳〵異れり

常夏のはなをたに見はことなしにすくす月日もみしかかりなん

つらゆき集に、床夏の花をしみれば、うちはへて、すぐす月日の數もしられずとあれど、語句いと〳〵異れば、別の　にやあらむかし、紀氏新撰には結句の數もヿ時もとあり、拾遺抄雜春にもつらゆきとあり

撫子のはなちりかたになりにけりわかまつ秋そちかくなるらし

赤人集にのへみればなでしこの花ちりにけりわがまつあきはちかづきにけり」とある、これもまた一つのうたなるべし

夏の夜の月はほとなくあけぬれとあしたのまをそ託ちよせつる

寛平中宮歌合のうた本集におなじ、興風集には腰の句明ながらとし、結句かこちよせけるとせり

あまのかは水まさるらし夏の夜はなかるゝ月のよとむまもなし

寛平中宮歌合に、なつのよはみづやまされる、あまのがはながるゝつきのかげもとゞめぬ」とあるも、ひとつのうたなるべし

夏虫の身をたきすてゝたましあらはわれをまねはん人目もるみを

伊勢集に、歌合のうた右とありて、二の句たきすてゝヿともしはてとし、下の句我をヿ我とゝせり、活字本伊勢集には、夏虫の身をも惜までたましあらば我とまねばん人目もるみぞと見ゆ

みな月祓しに云々

かもかはのみつそこすみててる月をゆきてみんとや夏祓する

家持集に出づ、二の句すみてヿみえてとしたり、活字本おなじ

みな月ふたつありけるとし

たなはたはあまの川原をなゝかへりのちのみそかをみそきにはせよ

六帖うるふづきに出づ、四の句後の七日とせり、作者伊勢とあるは錯なるべし

秋哥上

惟貞のみこの家の歌合のうた　　よみひとしらす

にはかにも風のすゝしくなりぬるか秋たつ日とはうへもいひけり

新撰萬葉、新撰朗詠共に同じ

ものおもひけるころ秋立日人につかはしける

たのめこし君はつれなし秋風はけふよりふきぬわかみかなしも

六帖秋のかせに出づ、二の句君ヲ人とし、つれなしヲつれなくとし、結句かなしもヲかなしなとせり

おもふこと侍るころ

いとゝしく物おもふやとの萩の葉にあきとつけつる風のわひしさ

本集一本に、四の句秋とつげくるとあり

女のもとよりふみつきはかり云々

秋はきをいろとる風のふきぬれは人のこゝろもうたかはれけり

六帖秋風に出づ、すべて本集に同じ、大和物語には作者染殿内侍とあり

題しらす

天の川わたらん空もおもほえすたえぬ別れとおもふものから

家持集に出でて、二の句かへらん空もとせり、活字本もおなじ

七日人のもとより返事に云々

こひ／＼てあはんと思ふ夕暮はたなはたつめもかくやあるらん

伊勢集に、七月七日としてこの歌を出せり

かへし

類なきものとはわれそなりぬへき棚機津女はひとめやはもる

伊勢集には、この二首のあひだに、あふほごに川をへだてゝこふるとはたなばたつめになにかことなる」といふ一首ありて、この返しうた出でたり、活字本も同じ

題しらす

玉かつらたえぬものから新玉の年のわたりはたゞひと夜のみ

萬葉集十に出づ、三の句あらたまのキさぬらくはとあり、六帖七日夜に出でて、三の句きぬるよはとし、四の句年の渡にとせり、人丸集には、上の句天の河よはふけ行てさぬるまはとあり、活字本は大に違へり

七日の夜　　よみ人しらす

たなはたの天の戸わたる今宵さへをちかた人のつれなかるらん

朝忠集に出づ、七月七日人にと題せり、三の句けふさへやとみゆ、活字本おなじ

あまのかは遠きわたりはなけれとも君かふなては年にこそまて

萬葉集十に出づ、六帖七日夜に出でて、作者人麿とあり、拾遺集もこれに同じ、二三の句共に、遠き渡りにあらねごもとしたり

あまのかは岩こす浪のたちゐつゝ秋のなぬかのけふをしそまつ

きのとものり

家持集結句けふこそおもへとあり、活字本には今日をしぞ思ふとせり

今日よりや天の川原はあせななんそこひごもなくたゞ渡りなん

六帖七日夜に出づ、作者友則とせり、四の句よごむともなくとあり、家持集には、四の句ふちせともなくとせり、活字本またおなじ

よみ人しらす

あまのかはなかれてこふる棚機のなみたなるらしあきのしら露

紀友則集おなじ、活字本には、四の句涙なるらむとあり

天の川瀬々のしらなみたかけれとたゞ渡りきぬまつにくるしみ

萬葉集十秋雑哥に出づ、二の句せゞにしら波とあり、紀友則集に四の句

たゞわたりしぬとあり友則集に入たるはまたく錯まりなり
あまのかはこひしきせにそわたりぬるたきつ涙に袖はぬれつゝ
紀友則集おなじ、活字本に二三の句こひしき瀬には渡り來ぬとせり
題しらす　よみ人しらす
秋かせに草葉そよきてふくなへにほのかにしつるひくらしの聲
六帖ひぐらしに出づ、二の句稻葉そよぎてとしたり、活字本には四の句
ほのかになりぬとせり
あき風のふきくる宵はきり〳〵すくさのねことに聲みたれけり
六帖きり〳〵すに出づ、作者つらゆきとせり、二の句ふきつる、四の句
草むらごとに、五の句聲みだるなりとしたり
わかことく物や悲しききり〳〵す草のやとりにこゑたえすなく
六帖蟋蟀に出づ、作者貫之とす、下の句枕集へに夜もすがらなくとせり
來むといひしほとやすきぬる秋の野に誰まつ虫そこゑのかなしき
六帖まつむしに出づ、作者つらゆきとあり、二の句ほどもすぎにしとし、
下の句人まつむしの聲ぞ悲しきとせり
あきの野に來やとる人もおもほえす誰をまつ虫こゝらなくらん
六帖まつむしに出でて、作者つらゆきとせれど、上の秋風のふきくる宵
はの歌以下五首家集にも見えず
秋風のやゝふきしけは野をさむみわひしきこゑに松虫そなく
六帖古一本にきり〳〵すの歌として、三の句以下をきり〳〵すわびしき
こゑになきしきるなり」とせり
風さむみなくまつむしのなみたこそ草葉いろとる露とおくらめ
新撰萬葉秋に出づ、松むしチ秋むしとし、下の句草葉之上丹露堵置良咩
とあり
こゝろもておふる山田のひつちほは君守らねと刈るひともなし
六帖冬田に出づ、すべて本集におなじ

秋哥中

寛平御時きさいのみやの歌合に　　よみ人しらす

浦ちかくたつあさ霧のもしほやく烟とのみそ見えわたりける

新撰萬葉おなじ、寛平中宮哥合にも作者なし、興風集には、結句あやまたれけるとあり

あきの野の露におかるゝ女郎花はらふ人なみぬれつゝそふる

朱雀院女郎花合ともに作者みえず、六帖女郎花に出でて、作者おきかせとあり、結句ぬれつゝやへんとしたり、興風集には結句わびつゝぞふるとせり

をみなへし花のこゝろのあたなれは秋にのみこそあひ渡りけれ

これも六帖女郎花に出でて作者もおなじ、興風集にみゆ、活字本には、二の句花のすがたのとあり

秋のよをいたつらにのみおきあかす露はわか身の上にそありける

六帖露に出づ、腰の句おきわたる、下の句露は我みのなにとそありけれとあり

おほかたにおく白露もいまよりは心してこそみるへかりけれ

是則集に出づ、活字本下句、心おきてぞ見るべかりけるとあり

あきの田のかりほの庵のにほふまてさける秋萩見れとあかぬかも

人丸集に出づ、二の句かりほの宿とあり、活字本おなじ

あきの夜をまとろますのみあかす身は夢路とたにもたのまさりけり

是則集に出づ、二の句まどろまでのみとし、四の句夢路とのみもとしたり、續千載集戀二にも出でて、作者是則とあり

秋のうたとて　　よみ人しらす

しらつゆのおかまくをしき秋萩をゝりてはさらに我やかさゝん

宗于集に二の句おかまく惜しみとせり、活字本には結句おきやからさむとあり、人丸集には、三の句以下を、秋萩のをりてみをりておきやかく

さむ」としたり、活字本これに同じ

題しらす　天智天皇御製

秋の田のかりほの庵のとまをあらみわかころもては露にぬれつゝ

日本風土記、秋田曉露と題をおきて、阿氣那塔那革里復那一屋那禿麻麻阿賴迷黃俺過路木鐵者紫油尼奴里漬々としたり

題しらす　よみ人しらす

おくからに千くさの色になるものを白露とのみひとのいふらん

六帖露に出でて、本集におなじ

秋の野におくしら露のきえさらは玉にぬきてもかけてみてまし

是則集露の歌に出づ、活字本には秋の野に露おほくおきたる所と詞書せり

あきのうたとてよめる　よみ人しらす

あきの夜の月のかけこそ木の間より落ち葉ころもと身に移りけれ

六帖秋衣に出づ、結句身にうつりぬれとあり、新撰萬葉、下の句落ればきぬとみえわたりけれとせり

惟貞のみこの家の歌合に

あきの夜のつきの光はきよけれとひとの衣のくまはてらさす

六帖秋月に出づ、三の句あかけれど、結句うちはてらさずとしたり、また一本にはうらはてらさずとせり

秋の月つねにかくてるものならは暗にふるみはましらさらまし

六帖秋月に出でて、作者深養父とあり

これさたのみこの家のうた合に

秋の夜はひとをしつめてつれ〳〵とかきなす琴の音にそなかるゝ

忠岑集に、つれ〴〵チつく〴〵、結句なかるるチ鳴ぬるとせり、活字本には結句音にぞなかれし」とあり

題しらす

あきの野によるもやねなん女郎花花の名をのみ思ひかけつゝ

古本躬恒集に、秋の野に一夜ねにけり女郎花はなの名だてにおもひかけつゝ」とあれど、同集版本には野に望みてと題して、女郎花いかに思ふらむ秋の野に一夜ぞねにし花の名だてに」とせり、活字本おなじ

女郎花いろにもあるかなまつむしをともにやとして誰をまつらん

六帖女郎花に出でて、作者素性とあれど如何あらむ、家集にもみえず

前栽に女郎花侍りける所にて

女郎花にほふさかりをみるときぞわか老らくはくやしかりける

古本躬恒集に、二の句おほかる野べをとあり、今本には此歌なし、活字本おなじ

秋哥下

題しらす

よみ人しらす

藤袴きるひとなみやたちなからしくれの雨にぬらしそめつる

家持集に出づ、本集と異ることなし、活字本二の句きる人のみや、結句ぬれそめにけるとあり

寛平の御時きさいの宮の歌合　在原棟梁

はなすゝきそよともすれは秋風のふくかとそきくひとりぬる夜は

寛平中宮哥合に、結句ひとりぬるみはとあり

あき風に誘はれわたるかりかねは雲井はるかにけふそきこゆる

新撰萬葉おなじ、寛平中宮歌合にわたるヲきつるとあり

ものおもふと月日のゆくもしらさりつ雁こそなきて秋をつけつれ

六帖雁に出でて、作者つらゆきとし、結句秋とつけつれとせり

やまとにまかりけるついてに

かりかねのなきつるなへに唐衣たつたの山はもみちしにけり

萬葉集十、人麿集に出づ、萬葉には作者未詳とし、二の句きなきしなべに、結句紅葉しぬらしと見ゆ、柿本集の活字本には、結句色づきにけり

とせり

やまとにまかりける時これかれともにて

よみ人しらす

あまのかは雁そとわたるさほ山のこすゑはうへも色つきにけり

六帖雁に出てゝ、首句あまのはら、腰の句遠山の、下の句梢はうへぞ色づきにける」とせり

六帖秋草に出てて作者元方とあり

いつれをかわきてしのはん秋の野にうつろはんとて色かはる草

友則集にも出てて、本集と異ることとなし

誰きけとこゑたかさこに小男鹿のなか〳〵し夜をひとりなくらん

家持集にも、友則集にも出てて、本集と異ることとなし、六帖松に出て作者友則とせり

うちはへてかけとそたのむ峰の松いろとるあきの風にうつるな

はつ時雨ふれは山邊そおもほゆるいつれのかたかまつもみつらん

六帖時雨に出で本集におなじ、友則集にみゆ、活字本の同集また同じ

紀氏新撰には下句、今ぞ紅葉の色まさりける」とあり

いものひもとくとむすふと立田山いまそ紅葉のにしきおりける

六帖霧に出で、二の句秋にもあるかなこし、結句山はてるらんとせり、

友則集には、龍田山をこえてよめると題がきしたり

みることにあきにもなるかな立田姫もみちそむとや山もきるらん

はらからとちいかなる事か侍りけん

よみ人しらす

宗于集おなじ、活字本には、君とわが妹せの中もとしたり

君とわれいもせの山も秋くれはいろかはりぬるものにそありける

題しらす

友則集には、龍田山をこえてよめると題がきしたり、活字本には、下の

からころも立田の山のもみちははものおもふ人のたもとなりけり

句おる人もなき錦なりけり」こせり

紀つらゆき

からころもたつたの山のもみち葉ははたものもなき錦なりけり

六帖紅葉に出でて、作者貫之とあり、貫之集には見えず、家持集には結句錦とぞみるとあり

よみ人しらす

朝風のうらふくからに山も野もなへてにしきにおりかへすかな

六帖錦に出でて、三の句野も山もとあり、また作者忠岑とあれど家集にはみえず

なとさらに秋かとゝはんからにしき立田の山のもみちするよを

六帖錦に出でて、初句なぞさらに、結句紅葉しるきをこせり

ほかのきくをうつしうゑて

故郷をわかれてさける菊のはな旅なからこそにほふへらなれ

六帖菊に出で作者貫之とあり、四の句たひらかにてそとす、貫之集には見えず

男のひさしうまてとこさりけれは

なにゝきく色そめかへしにほふらん花もてはやす君もこなくに

六帖菊に出て、初句なにしきくこし、作者千里とせり、千里句題和歌には首句なにしおふ、四句菊もてはやすこしたり

題しらす

いくちはたおれはか秋のやまことに風にみたるゝ錦なるらん

六帖機に出づ、本集におなじ

なほさりに秋の山邊をこえくれはおらぬ錦をきぬひとそなき

六帖錦に出づ、作者せきをとあり、二三の句秋の野山を分ゆけば、四の句錦をきぬにとしたり

もみち葉をわけつゝゆけは錦きて家に歸るとひとやみるらん

六帖錦に出づ、作者伊勢とあり、伊勢集には見えず
山風のふきのまに〳〵もみち葉はこのも彼面にちりぬへらなり
六帖紅葉に出づ、作者貫之とありて、このもかのもチおのがちり〳〵としたり、古寫本には、おのがちり〳〵なりぬべらなり」とせり、いと〳〵めでたく聞ゆ
あきのよに雨ときこえてふりつるは風にみたるゝ紅葉なりけり
寛平中宮歌合、首句あきのよのとす、新撰萬葉、腰の句降露者とし、下の句みたるゝチ散希留としたり
たちよりて見るへきひとのあれはこそ秋の林ににしきしくらめ
六帖錦に出でて、作者つらゆきとあり、貫之集にはみえず
木のもとにおらぬ錦のつもれるはくものはやしの紅葉なりけり
六帖錦に出でて、作者つらゆきとあり、貫之集には見えず
秋風にちるもみちははをみなへし宿におりしくにしきなりけり
六帖錦に出でて、作者貫之とせり、三四の句をとめ子がやとにおりきるとあり
もみちはのふりしくあきの山邊こそたちてくやしき錦なりけれ
六帖錦に出でて、これも貫之の歌とせれど、家集には見えず
立田川いろくれなゐになりにけり山のもみちそいまはちるらし
六帖紅に出でて、四の句山のももちもとせり、これも作者つらゆきとあれど家集にはみえず
もみちはのなかるゝ秋は川ことににしき洗ふとひとやみるらん
六帖錦に出づ、これも作者つらゆきとせれど、家集にはみえず
わすれにけるおとこの紅葉を折りて云々
思ひいてゝとふにはあらし秋はつる色のかきりを見するなるらん
拾遺集雑戀にも入たり
冬哥

題しらす　　よみ人しらす

はつ時雨ふれは山邊そおもほゆるいつれの方かまつもみつらん

六帖時雨に出づ、友則集にも見えて、龍田山をこえてよめる」と題がきせり

はつしくれふる程もなくさほ山の梢あまねくうつろひにけり

六帖時雨に出てて、貫之の歌とせり、貫之集には見えず、是則集に亭子院の歌合に時雨と題がきして出せり

冬くれは佐保の川瀬にぬる鶴もひとりねかたき音をそなくなる

本集一本にさほの河原、また佐保の河邊ともせり、伊勢集にもみゆ、首句ゆふされはとあり、活字本には結句音をもなく哉とせり

ひとりぬる人のきかくにかみなつきにはかにもふる初時雨かな

活字本躬恒集、二句人のきくにぞとあり、古寫本印本共に本集に同じ

秋はてゝしくれふりぬる我なれはちる言の葉をなにかうらみん

秋萩帖に二の句、霜になりにしとあり

ふく風は色もみえねと冬くれはひとりぬる夜のみにそしみける

六帖冬風又霜月にも出づ、新撰萬葉に、二四の句往裳不知砥云々ひとりある人のとあり、寛平中宮歌合は本集におなじ、活字本結句身にそしみぬるとせり

秋はてゝわかみ時雨とふりぬれは言の葉さへにうつろひにけり

秋萩帖、上の句かみなづき我身あらしのふくさとはとあり

神無月時雨はかりは降すしてゆきかてにさへなとかなるらん

伊勢集に、男云々いひつゝ参りこむといふものからえこで初雪のふる日と題して出したり、四の句ゆきがてにのみとせり

神無月かきりとや思ふもみち葉のやむときもなくよるさへにふる

六帖かみな月に出でて、作者つらゆきとあり、結句よるさへにちるとせり

ちはやふる神垣山のさかき葉は時雨にいろもかはらさりけり

六帖山に出づ、結句まさらざりけりとせり、躬恒集本集におなじ

すまぬ家にまできて紅葉にかきていひつかはしける

枇杷左大臣

ひとすますあれたる宿をきて見れはいまそこのはは錦おりかく

素性集には水尾のみかどかくれ給へるを白川にかへさのはらへし侍りしにと題して此歌を入たり、活字本には初句、人すまてとし結句錦をりけるとせり

題しらす　　よみ人しらす

ふゆの池鴨のうはけにおく霜のきえてもの思ふころにもあるかな

六帖鴨に出づ、首句冬のよのとあり、興風集にもみゆ、首句うきてぬるとあり

題しらす

みをわけて霜やおくらんあた人の言の葉さへにかれもゆくかな

六帖霜に出づ、四の句ことのはごとにとせり

かきくらしあられふりしけ白玉をしけるよはとも人のみるへく

六帖霰に出づ、首句かきくもりとあり、新撰萬葉、寛平中宮哥合同じ、杉本秋萩帖二の句あられふりつけ、腰の句しら玉の、四の句しける宿ともとしたり

今朝のあらしさむくもあるかな足引の山かきくもりしもやふるらし

六帖嵐に出づ、作者つらゆきとあり、二の句さむくもふくか、結句霜ぞふるらしチ雪やふるらんとせり、家持集にけひが家路あれまごはめや足引の山かきくもり雪はふるとも」とあるは別の歌ならむか

黒髪のしろくなりゆく身にしあれこまつ初霜をあはれとそみる

六帖雪に出でゝ、躬恒集の歌こ同じく、三の句みにしあれごチみにもあればとし、四の句霜チ雪、結句あはれこぞ思ふこせり

式部卿敦實のみこしのひてかよふ所云々
志らやまに雪ふりぬれはあとたえていまは越路に人もかよはす
六帖山に出づ、本集と同じ、大和物語には、二の句ふりにし雪のこせり
あられふる深山の里のわひしきはきてたはやすくとふ人そなき
六帖山里に出でて、三の句かなしきはとせり
年ふれといろもかはらぬ松か枝にかゝれる雪を花とこそみれ
六帖雪に出づ、結句花かとぞ見るとせり、新撰萬葉には三四の句松の葉にやどれる雪をとあり
志もかれのえたとなわひそ白雪のきえぬかきりは花とこそみれ
六帖雪に出づ、本集におなじ、新撰萬葉に三の句以下を少しかへて、白雪を花とまがひてみれごあかれぬとあるは、別の歌にやあらむ、活字本には花とやとひてこせりいかゞ
よを寒みねさめてきけは鴛鴦そなく拂ひもあへす霜やおくらん
金玉集本集におなじ、六帖をしに出でゝ首句冬のよをとあり
あらたまの年をわたりてあるかうへにふりつむ雪のたえぬ白山
六帖雪に出づ、結句きえぬしら山とせり、家持集おなじ、躬恒集首句神代より、腰の句あるがうちにとあり
まこもかる堀江にうきてぬる鴨のこよひの霜にいかにわふらん
本集一本四の句、こよひの霜をこあり、六帖霜出でて、三の句ゐる鴨のとせり
白雲のおりゐる山と見えつるはふりつむ霜のきえぬなりけり
新撰萬葉、本集におなじ、寛平中宮哥合に山ヲ宿、つむヲくる、消ヲとけとしたり
なかれゆく水こほりぬる冬さへやなほうき草のあとはとゝめぬ
新撰萬葉、秋萩帖共に本集におなじ、寛平中宮哥合、結句あとはさだめぬとあり

心あてにみはこそわかめしらゆきのいつれか花のちるにたかへる

六帖雪に出づ、首句心おきて、三の句ゐら雪も、結句まかへるとせり

あまのかは冬はこほりにとちたれや岩間にたきつ音たにもせぬ

六帖氷に出づ、二の句冬はそらまでこほればやとせり、寛平中宮哥合には、そらまで氷るらしとし、新撰萬葉には、空さへ凍けりとあり、秋萩帖には、そらさへこほればやとしたり

山ちかみめつらしけなくふる雪の白くやならん年つもりなは

六帖雪に出づ、三の句ふる里のとせり、みつね集おなじ、活字本に山近くとあり

まつの葉にかゝれる雪のうれをこそ冬の花とはいふへかりけれ

六帖雪に出づ、初句松のうへにとせり、新撰萬葉上の句、光俟枝丹懸留雪緒許曾とあり、寛平中宮歌合、大江千里句題和歌、秋萩帖いつれも新萬におなじ

ふる雪はきえてもゐはしとまりなん花も紅葉もえたになき頃

六帖雪に出づ、二三の句きえでもえたにたまらなん、結句たえてなきまはとせり、寛平中宮歌合、六帖におなじくて、腰の句本集のごとし、紀氏新撰えだにもしばしとまりなん」とありて、下の句六帖におなじ

涙川身なくはかりの淵はあれとこほりとけねはゆくかたもなし

六帖氷に出づ、結句かげはうこかずとあり、新撰萬葉結句景賞不宿としたり、寛平中宮歌合、秋萩帖共に新萬におなじ

ふる雪にものもふ我身劣らめやつもり〳〵てきえぬはかりそ

兼盛集に詞書を、雪のいみじうふるにとして、上の句を、物おもひてよにふる雪のわびしきは」とせり、上の句あらたまりたるゆゐに、よみ人しらずと本集にはせられしなるべし

よるならは月とそみまし我宿のにはゐろたへにふりつもる雪

六帖雪に出づ、二の句花とや見ましとあり、また結句ふれるしら雪とあ

り、貫之集にもみゆ、題、雪廷にみちたりとして、結句ふりしける雪とあり

梅かえにふりおける雪を春ちかみめのうちつけに花かとそみる

六帖雪に出づ、二の句ふりおける雪はとしたり

いつしかと山の櫻もわかことくとしのこなたに春をまつらん

清正集詞書、としかへりてものいはんと頼めし女にしはすにとして、上句を花さかぬ梅のたちえも我ことやとしたり

年ふかくふりつむ雪をみるときそ越のしら嶺にすむこゝちする

躬恒集、本集におなじ、六帖雪に出でゝ、四の句ふじの高根にとしたり

としくれて春あけかたになりぬれははなのためしにまかふ白雪

六帖年の暮に出づ、三の句なりぬればヲなりゆけば、まがふしら雪ヲふれるしらゆきとせり

冬の池にすむにほとりのつれもなくしたにかよはん人にしらすな

古今集戀三題しらず、作者みつねとせり、下句そこに通ふと人にしらすな」とせり、六帖氷に出づ、下の句こほりのしたをわれはかよはんとあり

ぬはたまの夜のみふれるしら雪はてる月影のつもるなりけり

六帖冬月に出づ、作者貫之とありて、二の句よるのみにふる、結句つもるヲたまるとしたり、貫之集には見えず

このつきの年のあまりにたたさらは鶯はゝやなきそしなまし

六帖閏月に出づ、二の句冬のあまりにとし、三の句あらざればとせり

關こゆる路こはなしにちかなからとしにさはりて春をまつかな

伊勢集、本集におなじ、六帖しはすに出でゝ二の句みちならなくに、結句春をまつかなとせり

戀哥一

題しらず　　よみ人しらず

いつしかとわかまつ山にいまはとてこゆなる波にぬるゝ袖かな

元良親王集、詞書、もののたまふ女、こと人にものいふと聞しめして宮としたり

女にとしをへてこゝろざしあるよしを云々

このめはる春の山田をうちかへしおもひやみにし人そこひしき

本集一本に、結句人ぞわびしき、また古寫本にうれたきとせり

しのびたる人につかはしける

いはせやま谷のしたみつうちしのひ人のみぬまは流れてそふる

伊勢集、哥仙歌集本同じ、作者人のとあり、群書類従本同じ、伊勢のうたはこの歌に對せるかへしの方なり

題しらす

ゆきやらぬ夢路にまとふ袂にはあまつそらなき露そおきける

本集一本、下句、天つ空なる露やおくらんとあり、勢語五十四段にも見ゆ

君により我身そつらきたまたれのみすは戀しとおもはましやは

素性集に出づ、うた本集におなじ

女のもとにつかはしける

わたつうみのふかき心のなかりせはなにかは君をうらみしもせん

伊勢集、題つらくなりたる人にとして、なかりせばチかはらずは君をチ人をとせり

をとこのもとにつかはしける　中つかさ

はかなくておなし心になりにしを思ふかことはおもふらんやそ

返し　源信明

侘しさをおなしこゝろときくからに我身をすてゝ君そかなしき

信明集に、始めてのつとめてかへりたる女と題してはかなくての歌を載せ、返し本集におなじ、中務集、本うたのかたまた人とあり、返しの方中つかさとみゆ

まからす成にける女の云々

さためなくあたにちりぬる花よりは常磐の松のいろをやは見ぬ

返し　よみ人志らす

住吉のわか身なりせは年ふとも松よりほかのいろをみましや

中務集、本うた、さだめなくあだなるものをみるよりはときはにあらぬ色をはやみぬ」とある方、中務のうたのさまにみゆ、信明集、中務集の活字本には、此二首共に見えず

をとこにつかはしける　よみ人志らす

現にも果なきことのあやしきはねなくに夢のみゆるなりけり

六帖夢に出づ、三の句わびしきは、下句夢と思ふなりけりとせり、本集戀三にも重ねて出せり

戀哥二

女のもとにはしめてつかはしける　藤原忠房朝臣

人をみておもふおもひもあるものを空に戀るそはかなかりける

寛平中宮歌合に、作者の名はなくて、歌の二の句おもふことだにとせり

女につかはしける　よみ人志らす

よもすからぬれてわひつる唐衣あふさかやまに道まとひして

元良親王集、詞書、女宮「ねにたかくなきぞしぬべきうつせみのわがみからなるうきよとおもへば（玉葉戀五よみ人しらず）とのたまひければ、あはれ〳〵とてとゞまり給ひにけり、同じ御中にもまだしかりける時の、此宮におはしはじめてのまたのひ、京極の御息所の御許に奉り給ひける」とありて、歌、首句いとゞしく、二の句ぬれこそまされ、四の句あふさかのせきさせり

女のもこにつかはしける

おこにのみきゝこし三輪の山よりも杉のかすをは我そみえにし

中務集おとにのみありとはきけご三わの山、すぎの生たるかごだにもみ

ず」とある本歌にやと覺ゆれど、返しのうたなるさまもあらねばなほい
かゞあらむ、活字本には共に見えず

題しらす　　ありはらのむねやな

わか戀のかすにしとらはしろたへの濱の眞砂もつきぬへらなり

宗于集にも入たり、活字本にも見ゆ

こと女の文をめのみんといひけるにみせさりけれはうらみけるにその
ふみのうらにかきつけてつかはしける　　よみ人しらす

これはかく恨ところもなき者をうしろめたくは思はさるらむ

信明集に、詞書、人のふみをえてかくせば女のうらむればふみのうらに
かきてみする」とありて、初句みればかく、結句おもはざらなんとせり

題しらす　　藤原清正

あふことのよゝをへたつる呉竹のふしのかすなき戀もするかな

清正集には見えず、活字本にもなし、公忠集に女のもとにと題して首句
あふことを、二の句世々にへたつるとせり

兼輔朝臣にあひはしめて云々　　清正母

ふりとけぬ君かゆきけのしつくゆゑ袂にとけぬこほりしにけり

兼輔集に、女「うきみとて雪ふるまゝに消にしを人にとはれむたましひ
もみむとある返し此歌なれは本集とかなはず、活字本もおなじ

題しらす　　大江千ふる

おもひやる心にたくふみなりせはひと日にちたひ君はみてまし

素性集に入たり、上の句思ひやりこゝろにかなふものならばとあり、活
字本おなじ、一本に結句君を見てましとしたり

月をあはれといふはいむなりといふ人のありければ　　よみ人しらす

獨ねのわひしきまゝにおきゐつゝ月をあはれといみそかねつる

小町集、詞書、中たえたるをとこの、しのびてきてかくれてみけるに、月のいとあはれなるをみて、ねんことこそいとくちをしけれと、すのこにながむれば、いむなるものをとい「へば」とあり

戀歌三

よみ人しらす

下紐のしるしとするもとけなくに語るかことはあらすもあるかな

六帖紐に出づ、結句こひずぞあるべきとあり

女のいとおもひはなれていふにつかはしける

うつゝにもはかなきことの侘しきはねなくに夢と思ふなりけり

本集戀一に出でて、三の句あやしきはトわひしきはト變れるのみなるをまたこゝにも出たるは錯りなるべし

あさかほの花まへにありけるさうしよりをとこのあけていて侍りけるに

よみ人しらす

もろともに折るともなしにうちとけてみえにけるかな朝顔の花

朝忠集、詞書、たいふがもとよりあけぼのにいでて」とありて、歌みえにけるかなチみえやしぬらむとせり

たいしらす

みつね

君をおもふこゝろをひとにこゆるぎの磯の玉藻やいまもからまし

六帖磯に出づ、作者たゞみねとあれど、忠岑集には見えず、躬恒集に出でて、下句、磯の玉藻も今やからましとせり、題に別を惜むとありて、もとは戀のうたにあらず

人の許にまかりけるに云々ものいひけるをすをひきあけゝれは云々

藤原守正

あらかりし涙の心はつらけれどすこしによせし聲そこひしき

清正集に、女房の知りたるに物いひける程に、親めきたりける人のきゝつけて、ゐて入たりける朝に」と詞書したり、活字本おなじ

せうそこつかはしける女の又こと人にふみつかはすときゝて今は思ひ
たちねといひおくりて侍りける返事に
贈太政大臣
松山につらきなからも浪こさんことはさすかにかなしきものを
伊勢集に出でて、いせの海にあそぶ蜑とも成にしか波あきわけてみるめ
潜かむ」と云ふ歌の返しとせり
たいしらす　　贈太政大臣
あぢきなくなさか松山なみこさんことをはさらに思ひはなるゝ
伊勢に、これも返しとして出でて二首共に伊勢のうたのさまなり
心さしありていひかはしける女のもとより人かすならぬやうにいひ侍
けれは　　長谷雄朝臣
汐のまに漁りする海人もおのかよゝかひありとこそ思ふへらけれ
兼盛集に、須磨と題して、須まのうらにあさりするあまの大かたはかひ

あるよとぞおもふべらなる」とあるに似たり
みやつかへし侍けるほとひさしくありてものいはんといひ侍けるにお
そくまかりけれは　　枇杷左大臣
よひのまにはや慰めよいそのかみふりにし床もうちはらふへく
業平集、詞書、みやづかへしける人をひさしくまからでむかひにまうづ
れど、とみにもいでざりければ」とありて、この歌を出せり、活字本に
は詞書なし
たいしらす　　い　せ
いとはるゝ身をうれはしみいつしかと飛鳥川をも頼むへらなり
返し、贈太政大臣、「あすか川せきてとゞむるものならばふちせになる
となにかいとはん
伊勢家集、詞書、男のひとのもとにあるにやるとありて、「あすかゞはふ
ちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふめり」伊勢返し、いと

はるゝみを云々とせり、本うたは伊勢にて、このうたは男の返歌のさまなり

人のこゝろつらくなりにけれは袖といふ人をつかひにて

よみ人しらす

人しれぬわかものおもひの涙をは袖につけてそみすへかりける

信明集、詞書、そでといふ女つかひたる人に、その女につけていふとあり

女のもとにまかりたるにはやかへりねとのみいひけれは

よみ人しらす

つれなきを思ひしのふのさねかつら果はくるをも厭ふなりけり

六帖さねかづらに出でて、結句いとふへらなりと」せり

しのひてかよひける人に

藤原有好

相見てもつゝむ思ひのわひしきは人間にのみそねはなかれける

亭子院哥合には作者なし、うた本集におなじ、新勅撰戀三にも入たり、作者伊勢とありて、わひしきヲかなしきとせり、伊勢集、詞書、人に物いひてなほつゝましかりけるころとあり

人のもとよりかへりまできてつかはしける

坂上是のり

あひみてそ慰むやとそおもひしを名殘しもこそこひしかりけれ

是則集には、初句あひ見てはとあり、拾遺集戀三にも入たり、結句わすれかたけれとあり、活字本家集またおなじ

戀哥四

つれなくみえける人につかはしける

よみ人しらす

くれなゐになみたうつるときゝしをはなとといつはりと吾思ひけむ

本集一本に、三の句きゝつるをとあり

返し

紅になみたしこくはみとりなる袖ももみちとみえましものを
伊勢集には、こくはチなくはとし、人の詠みければと題して、この歌をのせたり、前歌はなし
題しらす
こさまさる涙の色もかひそなきみすへき人のこのよならねは
伊勢集、本集におなじ
女のもとにつかはしける
すみよしの岸にきよする奥津浪まなくかけてもおもほゆるかな
伊勢集、詞書、「おとこのあになりし人」とありて、この歌をのせ、返しとして、「住吉の目に近からば岸にゐて渡のかずをもよむべきものを」の歌を出せり
たいしらす
あふこたにかたみにみゆる夢ならは忘るゝほともあらまし者を

伊勢集にゆめチものとしたり
音にのみこゑをきくかなあしひきの山下水にあらぬものから
六帖近くて逢ずに出でて、二の句聲をきくらむとせり、伊勢集おなじ、活字本もまたおなじ
白露のおきてあひみぬことよりは衣かへしつゝねなんとそおもふ
伊勢集おなじ、活字本にはきぬチきえさしたり
女のもとにつかはしける　朝忠朝臣
白浪のうちいつる濱のはま千鳥あとやたつねるしるへなるらん
六帖濱千鳥に出でて、作者あさたゞとあり、二の句たちよるからのとしたり、續後撰戀五には、たちよるはまのとせり、朝忠集二の句たちかへる浦の、五の句しるべなるらむとあり、活字本おなじ
平のかねきかやう〳〵かれかたになりにけれは云々　中務

秋風のふくにつけてもとはぬかな荻の葉ならはおとはしてまし

六帖荻に出づ、中務集二の句ふくをりにしもこせり

またあはす侍りける女のもこに云々

おなしくは君こならひの池にこそ身をなけつとも人にきかせめ

本集一本に、五の句人にいはれめとしたり、六帖池に出づ、結句人にかたらめとあり

人のもとより歸りて遣しける　　　　貫　之

曉のなからましかはしらつゆのおきてかなしき別れせましや

本集一本に、二の句なき世なりせばとしたり

返し

おきてゆく人の心をしらつゆの我こそまつはおもひきえぬれ

貫之集六に出づ、うた共に本集に同じ

大輔かもとにまうてきたりける云々　　　　朝　忠　朝　臣

いたつらにたちかへりにし白浪のなこりに袖はひるときもなし

朝忠集おなじ、活字本には、二の句たちかへりぬるとあり

返し　　　　大　　輔

なにゝかは袖のぬるらんしらなみのなこりありけもみえぬ心を

朝忠集おなじ、このうた素性集にもみえて、なにしかも袖のぬれけむ白波の名殘ありとも見えぬこゝろをとしたり、活字本の同集には、下句、なごりありともみえぬけしきをとせり

大輔かもとにつかはしける　　　　敦　忠　朝　臣

池水のいひいつることのかたけれはみこもりなから年そ經にける

朝忠集にも入たり、はじめにやと詞書あり、活字本おなじ

戀哥五

題しらす　　　　よみ人しらす

なからへは人のこゝろもみるへきに露の命そかなしかりける

小町集おなじ、活字本には二の句、人の心も見ゆべきにとあり

おとこのつらうなりゆくころ雨のふりければ云々

ふりやめば跡たに見えぬ水泡のきえてはかなき世を頼むかな

六帖うたかたに出づ、一本に二の句消てあとなきとあり

題しらす　よみひとしらす

春霞はかなくたちてわかるとも風よりほかにたれかとふへき

伊勢集にも出づ、活字本には、初句春の雁とあり

女のもとよりさためなき心ありなと申たりければ

贈太政大臣

深く思ひそめつといひしことのはいつか秋風ふきてちりぬる

本集雑四にも出で、伊勢と贈答のうたなり、伊勢集もおなじ

ものいひける人の久しうおとつれさりける云々

年をへていけるかひなき我身をはなにかは人にありとしられん

本集一本に、五の句ありと知らせむとせり、新撰朗詠隠倫に、おちつもる朽葉か下のみなしくり何かは人にありとしられん」とあるおなじさまなり、又同書一本に三の句かくれ水、活字本にはこもり水とせり

たかあきらの朝臣にふえをおくるとて　よみ人しらす

笛竹のもとのふるねはかはるとも己かよゝにはならすもあらなん

西宮左大臣集に、詞書、ふえを人のもとにおかせ給とて」と題して此歌を載せたり

ひさしくいひわたり侍けるにつれなく云々

なりひらの朝臣

たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ

業平集にも見ゆ、活字本には、五句人にしらせむとせり、新古今集戀二には作者みつねとあれど、躬恒集には見えず

返し　いせ

夏虫のしる〳〵まとふおもひをはこりぬかなしと誰かみさらん

伊勢集に、年をへて物いひわたりける人の」と詞書して、この贈答二首を載せたり、また古寫本の業平集には、上のうたの返し作者女とのみあり、下の句かなしチあはれとしたり

返しせぬ人につかはしける　　よみ人しらす

うち侘てよはゝんこゑに山彦のこたへぬ山はあらしとそおもふ

古今集戀一作者つらゆきとあり、貫之集にもみえたり、されど詞書はなし、六帖山彦に出でて、四の句こたへぬ方はとしたり

返し

山彦のこゑのまに〳〵とひゆかはむなしき空にゆきやかへらん

六帖山彦に出でたり、つらゆき集にもみゆ、三の句以下、尋ねゆけばいづこともなくわれやまどはん」とせり、さてこの歌と前の歌とは別所に出でて、贈答にあらずして、本集とはたがへり

おもひわすれにける人のもとにまかりて

ゆふやみは道もみえねど故郷はもとこし駒にまかせてそくる

大和物語、作者越前の權のかみ兼盛とあり、首句夕ざれば、結句まかせてそゆくとあり、六帖夕暗に出でたり、兼盛集には見えず

返し

駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくるとおもひけるかな

大和物語、作者兵衛君とせり、腰の句、はかなくもとあり

戀哥六

女のもとにつかはしける　　よみ人しらす

恨むれどこふれど君かよとゝもにしらす顔にてつれなかるらん

返し

うらむともこふともいかゝ雲井よりはるけき人を空にしるへき

この贈答二首共に宗于朝臣集にみゆ、活字本もおなじ

はしめて人につかはしける

おもひつゝまたいひそめぬ我こひをおなし心にしらせてしかな

六帖いひ初むに出づ、みつね集にも見ゆ、共に結句ひとはしらなんとせり、活字本おなじ

おもひかけたる女のもとに　　あさよりの朝臣

ふしの嶺をよそにそ聞きし今はわかおもひにもゆる煙なりけり

朝忠集にも入りて女御にとあり

返し　　よみ人しらす

しるしなき思こそきくふしのねもかことはかりの煙なるらん

朝忠集には、二の句思ひときけばとせり

題しらす

夏衣みにはなるとも我ためにうすきこゝろはかけすもあらなん

和泉式部集に、夏衣きてはみえねとわかためにうすきこゝろのあらはなしかなとあるは、いとよく似たるうたなり

おもひつゝ經にける年をしるへにてなれぬるものは心なりけり

六帖いひはしむに出でたり

女の男をいこひてさすかにいかゝおほえけんいへりける

ちはやふる神にもあらぬわかなかの雲井遙になりもゆくかな

六帖鳴神に出でて、結句なりまさるかなとせり

もとよしのみこのみそかにすみ侍ける比今こんとたのめてこすなりにけれは　　兵衛

人しれすまつにねられぬ有明の月にさへこそあさむかれけれ

元良親王集にみゆ、詞書、かねもとのむすめの、童部の夜まゐらんとのたまひて、おはせさりけるに、またのひ女」とあり

題しらす　　よみ人しらす

こふれともあふ夜なききみは忘草夢路にさへやおひしけるらん

古今集戀五にも出たり、本集一本、活字本等には、下句夢ぢにさへも生茂りつゝ、とあり

心さし侍る女宮つかへし侍けれはあふことかたくて侍りけるに雪のふるにつかはしける

我こひし君かあたりをはなれねはふるしら雪も空にきゆらん

返し

山かくれきえせぬ雪のわひしきは君まつの葉にかゝりてそふる

此返しの歌、兼盛集にみゆ、詞書に、冬山寺に心ちわづらひて有けるに、こんといひたりける人まつほどに、雪の松にかゝりけるをとありて、贈答のさまとも思はれず、いかゞありぬべきか

雜哥一

あひしりて侍りける女こゝろにもいれぬさまに侍けれは云々

よみ人しらす

濱千鳥かひなかりけりつれもなき人のあたりはなきわたれとも

兼盛集、詞書、いかてとおもふ人のちかくあるあたりに來てとあり、活字本もおなじ

ひたゝれこひにつかはしたるにうらなんなきそれはきしこやいかゝといひたれは　藤原元輔

すみよしの岸ともいはし奥津浪なほうちかけようらはなくとも

元輔集には見えず、忠見集、詞書、あるひとのひたゝれえさせむとあるからをなんうしなひたると申」とあり、活字本には、下垂とらせむこすれどうらなむなきといふ人に」とせり、古寫本に二三句を、岸ともいはて白波のとしたり

まさたゝかとのゐものをとりたかへて大輔かもとにもてきたりけれは　大輔

ふるさとの奈良の都のはしめよりなれにけりともみゆる衣か

朝忠集、詞書、とのゐものを、うちの人のつぼねに、もてたうべたりけるに、きたなげなる上のきぬに、むすびつけたりける」とあり、活字本の詞書は錯ありて讀みがたし、結句見ゆるきぬかなとせり

返し　雅正

ふりぬとて思ひもすてじ唐衣よそへてあやなうらみもぞする

これも朝忠朝臣の集にみえて、前歌の返しとせしは同じきも、作者はさだかならず

雜哥二

戒仙かふかき山てらにこもり侍りけるに云々

よみ人志らす

いつれをか雨ともわかんやまふしのおつる涙もふりにこそふれ

素性集、詞書、山でらにこもりて、あはれなることをいひて、夜とまりてうちなきなごして侍るほどに、雨のふりければ」とあり、活字本結句夜半にこそふれとあり

たまさかに通へりけるふみをこひかへしけれはそのふみにくしてつかはしける

もとよしのみこ

やれはをしやらねは人にみえぬへしなく〳〵も猶かへす勝れり

元良親王集には、詞書、さま〴〵かよはし給ひけるみふみども今日かへし奉りたまふとて」とありて、作者御息所とせり

まかりかよひける女の心とけすのみみえ侍りけれは云々

よみ人志らす

なにはかた渚のあしのおいかせにうらみてそふるひさの心を

兼盛集にみゆ、詞書、なほいとつらかりける女にとありて、三の句老かよにヲおひかぜにとしたる本あり、後拾遺戀四にも出でて、作者かねもりとせり

女のもとよりうらみおこせて侍ける返事に

わするとは怨みさらなんはしたかのごかへる山のゐゐは紅葉す　よみ人ゐらす

六帖小鷹に出づ、首句つらしともとあり、兼盛集にもおなじくみゆ

題しらす　伊　勢

ふく風のしたの塵にもあらなくにさもちりやすき我なき名かな

伊勢集四の句さもたち易きとあり

雑哥三

題しらす　よみ人ゐらす

みやひとゝならまほしきを女郎花のへより霧のたち出てそくる

九條右大臣集にみゆ、いかなるをりにかと題がきせり

なき名たちけるころ

よとゝもにわかぬれ衣となるものはわふる涙のきするなりけり

伊勢集になき事を人のいひしころト題がきして、結句きするなるべしと

みゆ、六帖ぬれきぬに出てたり、伊勢集におなじ

大輔かさうしにあつたゝの朝臣のもとへつかはしけるふみをもてたか

へたりけれはつかはしける　大　輔

道しらぬものならなくにあしひきの山踏まよふ人もありけり

朝忠集には、あさたゞの中納言物にやりける文を夕にたがへてもていき

たりければ女」と詞がきしたり

返し　敦忠朝臣

ゐらかしの雪もきえにしあしひきの山路を誰かふみまよふへき

朝忠集にも入たり、結句べきヲらんとしたり、活字本は本集の如し

題しらす　よみ人ゐらす

つきもせすうきことの葉のおほかるをはやく嵐の風もふかなん

元良親王集にみゆ、詞書に、いとあだにおはすときゝて女とあり、さて

此うたの前のうたの詞書に、右近といふ人のきこえけるごあれば、これ

も同じ人なるべし。本集一本、結句かせもふきなむとあり

いとしのひてかたらひける女のもとに云々

島かくれ荒磯にかよふあしたつのふみおくあとは波もけたなん

伊勢集に、おとこ「なごの海のきよきなぎさのはまちどりふみおくあとはなみやけつらん」とあるに似たり、活字本にはこの歌見えず

題しらす

たきつ瀬のはやからぬをそ恨みつゝ見すとも音をきかんと思へは

伊勢集に出て、いはせ山谷のした水うち忍び人のみぬまはなかれてぞふる」の返しとせり

つくしの白川といふ所に住侍りけるに云々　　ひかきの嫗

年ふれはわか黒髪もしら川のみつはくむまておいにけるかな

檜垣嫗集、首句二の句、老はてゝかしらのかみはとあり、清輔袋草紙本集におなじ、又重之集に、ひはとのゝいはゐに、女のみつくむさしのぞきつゝかげみれば「としを経てすめるいづみにかげみればみづはぐむまで老にけるかな」とも見ゆ、また後拾遺集雑五にも出でて、結句老ぞしにけるとせり、大和物語、初句むばたまの、結句なりにけるかなとしたり

題しらす　　つらゆき

かへりくる道にそけさは迷ふらんこれになすらふ花なきものを

本集一本に、五の句花しなければとあり、伊勢集にも入たり

大井なる所にて人々酒たうへけるついてに　　なりひらの朝臣

大井川うかへるふねのかゝりひにをくらの山もなのみなりけり

家集に、二の句うけるかはべのとあり

たいしらす　　よみ人しらす

たきつせのうつまき毎にとめくれは尙たつね來るよの憂目かな

六帖海松に出づ、作者素性とあり、素性集にはみえず、さて六帖にみるめに入たるは誤なること、勢冲の說あり、又腰の句とゞむれど、四の句なほもとめつるとせり

ふしみといふ所にて云々　よみ人しらす

すかはらやふしみのくれにみわたせは霞にまかふをはつせの山

六帖山に出づ、うた本集に同じ

雜哥四

かはつをきゝて

わか宿にあひやとりしてすむ蛙よるになれはやものはかなしき

六帖蛙に出づ、うた本集におなじ

おとこの人にもあまたとへわれやあたなる心あるといへりけれは

伊勢

飛鳥川ふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふめり

伊勢集詞書に、男のひとのもとに、あだにあるといへるにとし、活字本にはあるにやるとせり、しかしてこのうたの返しのうたに、いとはるゝみをうれはしみいつしかとあすかゞはをもたのむべきかな」とあり、もとうた伊勢ならば、返しのうたは男にてあるへきに、本集戀三に、此返しのうたをも出して、作者伊勢とせられたるはいかゞありぬべきか

となりなりけることをかりて返すついてに　よみ人しらす

あふことのかたみの聲のたかけれは我泣くねとも人はきかなん

伊勢集の詞書に、ことかはりたる人に」とあり、三の句高からばとせり、活字本おなじ

物思ひけるころ　いせ

あひにあひて物おもふころのわか袖にやとる月さへぬるゝかほなる

古今集戀五に出でて、本集におなじ、伊勢集もまた同じ

題しらす　贈太政大臣

ふかくおもひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる

返し　伊勢

心なきみはくさはにもあらなくに秋くるかせにうたかはるらん

この贈答二首伊勢集に出づ、然してこのもとうたのかたは、本集戀五にも出たり、活字本また同じ

人にわすられたりときく女のもとにつかはしける

よみ人しらす

世の中はいかにやいかに風の音をきくにもいまは物そかなしき

本集一本、結句ものや悲しきとあり、伊勢集詞書、友だちなる人のおもふことあるころとぶらふとて」とあり、活字本には、このうたなくして直に次のうたを出せり

返し　伊勢

よのなかはいさともいさや風の音はあきにあきそふ心地こそすれ

活字本三十六人集の中なる伊勢集には、前歌をこのうたの頭に注せり

題しらす　よみ人しらす

たとへ來る露とひとしき身にしあれば我か思ひにもきえんとやする

本集一本、初句たとひくるとあり、伊勢集に結句けなんとぞおもふとせり、活字本は本集におなじ

ふしみといふ所にて

名にたてゝ伏見の里といふことは紅葉をとこにしけはなりけり

伊勢には、伏見にてと題して載せたり、四の句もみぢを朱にとあり、活字本おなじ

離別歌

あひしりて侍りける人の東のかたへ云々

よみ人志らす

あたひとの手向にをれるさくら花あふ坂まではちらすもあらなん

朝忠集詞書、をんな藏人監といひける、あづまへ下るに」とあり、首の句、二の句、別れぢをゝしむこゝろのとせり、結句ちらずもヲちらでもとしたり、活字本おなじ

志もつけにまかりける女にかゝみにそへて云々

ふたこ山ともにこえぬとますかゝみ底なる影をたくへてそやる

六帖鏡に出づ、二の句ともに越えねばこし、結句たづねてぞやるとせり

題しらす　　よみ人志らす

そむかれぬ松の千年のほとよりもとも／＼とたに慕はれにけり

伊勢集には、これも返しとせり、活字本おなじ、結句したはれぞせしさあり

返し

とも／＼と志たふ涙のそふ水はいかなる色にみえてゆくらん

伊勢集に三の句河水は、下の句いかなる色かして流るらむとあり

みちのくにへまかりける人に云々

別れゆく路のくもゐになりゆけはとまるこゝろも空にこそなれ

六帖別に出づ、三の句成りぬればとあり

むねゆきの朝臣のむすめみちのくにへ下りけるに

いかてなほ笠取山に身をなしてつゆけき旅にそはんとそおもふ

宗于集に出づ、活字本もおなじ

返し

かさとりの山とたのみし君をおきて涙のあめにぬれつゝそゆく

宗于集にみゆ、詞書、むすめのみちの國へまかるにみやよりたまはせたる」とありて、前のうたを載せ、返し娘として此歌を載せたり、活字本おなじ

をさこのいせのくにへまかりけるに

君かゆくかたにありてふなみた川まつは袖にそなかるへらなる

宗于集にみゆ、詞書本集におなじ、作者宗于朝臣のむすめなり

たひにまかりける人にさうそくつかはすとて云々

袖ぬれてわかれはすこもから衣ゆくとないひそきたりとをみん

宗于集に出づ、活字本おなじ

返し

わかれちはこゝろもゆかす唐衣きてはなみたそさきにたちける

宗于集に出づ、下の句きたれば涙さきたちつゝとあり

たひにまかる人にあふきつかはすとて

そへてやるあふきの風しこゝろあらはわかおもふ人のてをな離れそ

六帖扇に出づ、二三の句あふぎの風も吾思ふこせり、宗于集もおなじ

あひしりて侍りける人のあからさまにこしのくにへまかりけるにぬさ

心さすとて　よみ人しらす

我をのみおもひつるかのこしならはかへるの山は惑はさらまし

返し

君をのみいつはたと思ひこしなれはゆきゝの道ははるけからしを

中務集いつはたとまつほどすぎしゑら山にゆききのあとをたつねざらめ

やなごあると同じ趣なり

はる霞はかなくたちてわかるとも風よりほかに誰かとふへき

本集戀五に既に出でたり、伊勢集にも見ゆ作者人とあり

舟なくは天の川までもとめてん漕きつゝしほのなかにきえすは

伊勢集に出づ、下の句こきてんほしのとせり

ふねにてものへまかりける人

かねてより涙そそてをうちぬらすうかへる舟にのらんとおもへは

伊勢集に出づ、作者行人とありうかべるチうきたるとしたり

羇旅哥

たはれしまをみて　　よみ人しらす

名にしおはゝあたにそおもふたはれしま浪の濡衣いくよきつらん

勢語六十一段に出づ、結句きるといふなりとあり

賀哥

賀のやうなることし侍けるところにて　　よみ人しらす

百年といはふをわれはきゝなから思ふかためはあかすそありける

六帖祝に出でて作者つらゆきとあり、貫之集にもみゆ、活字本おなじ

哀傷哥

めのみまかりて後すみはへりける所の壁に云々　　兼輔朝臣

ねぬ夢にむかしの壁を見てしよりうつゝに物そ悲しかりける

本集一本、三の句見つるよりとあり、家集には漏たり

11
3
309

終